

影響深度を大きく超えるためにトレーニによる深掘りは実施していない。このため、第3造構面は中砂～粗砂層であるが、これが洪水砂か河道の上面であるかは判断できず、河道の南肩も確認していない。

3. まとめ 今回の調査では4面の造構面が確認された。

周囲で実施した調査結果を合わせると、弥生時代前期には河道が存在していた事が理解できる（第4造構面）。今回の調査では、この河道は工事の影響深度より深いため、トレーニ調査を除き、上面を検出しただけ終了している。他の調査結果では、この河道から多くの弥生時代前期の土器の他、鍬や編み物製品などの木製品や石斧等の石製品が出土している。弥生時代前期にはこの河道の周囲にはすでに集落が営まれていた様である。

またこの河道が埋没した後も柱穴等が確認されており（第3造構面）、引き続き集落が存在した事が理解できる。

今回の調査で最も造構が検出された時期は弥生時代中期後半である。この造構面（第1造構面、第2造構面）からは堅穴住居の他、櫛列や土坑等が確認されている。現在までの調査結果を合わせると、周囲には弥生時代中期後半の集落の中心部分が広がっている事が理解できる。

今回実施した弥生時代中期後半の造構面は、2面（第1造構面、第2造構面）として調査しているが、これは土壤化層の上面と下面で調査を実施した可能性がある。この土壤化層を除去すると、上面（第1造構面）の堅穴住居等が削平され消滅するために、2面にわたる結果となった。

また第1造構面より上層（黒灰色砂質土の上面）で精査を実施したが、弥生時代後期の造構は確認できなかった。弥生時代後期の土器は少量であるが、出土している。

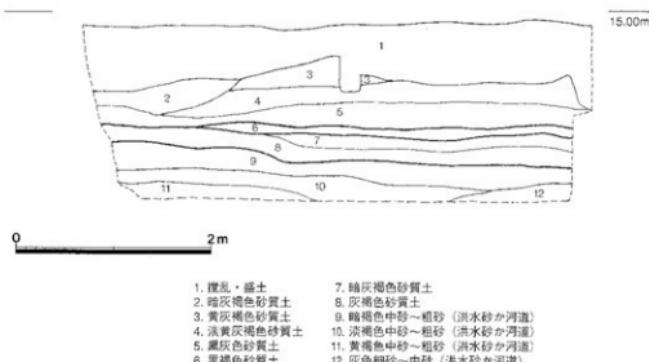


fig.209 調査区断面図

31. 舞子砲台跡 第4次調査

1. はじめに

江戸時代を通して鎖国政策をとり、平和を維持してきた日本であったが19世紀の後半になると各地の沿岸に外国船が出没し、幕末期には日本近海の海岸線における防備体制の必要性が重視され始めた。このため日本各地の沿岸には約1000基の台場が設置されることになった。

内海であった大阪湾岸も安政元（1854）年ロシアのチャーチンが来航したため、京都の御所を守るという意味から、この地域も幕府の海岸防備体制の重点地区のひとつとして位置づけられ大阪湾へ3つの入り口である紀州加太浦～友ヶ島、友ヶ島～淡路由良と明石海峡の最狭部である淡路岩屋（松帆）～明石（舞子）に台場が築かれた。

舞子にはすでに嘉永6（1851）年に明石藩によって台場が設置されていたが、文久3（1863）年将軍徳川家茂が摂海（大阪湾岸）の防備状況の視察を行った結果、明石海峡の警備強化を図るために明石藩に命令が下り、幕府から一万両を貸与され急速改築され、総石垣造りの稜堡式と呼ばれる西洋式の砲台（台場）となった。なお工事は勝蔵太郎（海舟）の指導にもとづいて、明石藩が主として施工したものとされている。

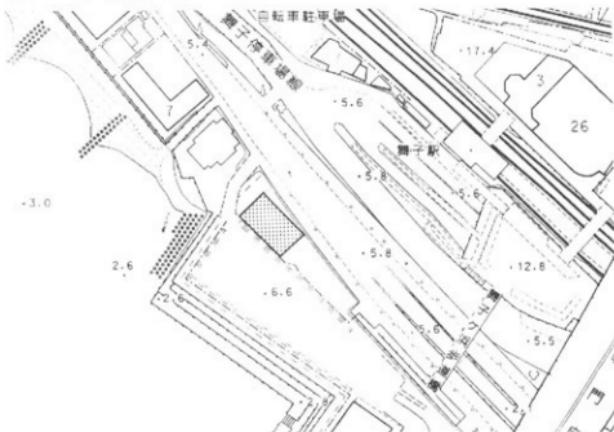


fig.210
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査では、前回までの調査成果をふまえて砲台跡の左翼（東半部分）の背面の石垣およびこの石垣に付随する施設や砲台の内側・後方の施設の存在の有無を確認することを目的として調査を行なった。

小口部

この結果、砲台左翼端の小口部の石垣およびシノギ角の背面の石垣が検出された。

小口部は、上端の幅6.7m、最下段では東側の一部が法面のため未確認であるものの推定9.4m（検出長6.0m）、高さ6.0mの規模で基底部に土台木が設置されている。

シノギ角

小口部の西側約6mでW字形の砲台の内側に屈曲する部分のシノギ角の背面を確認した。

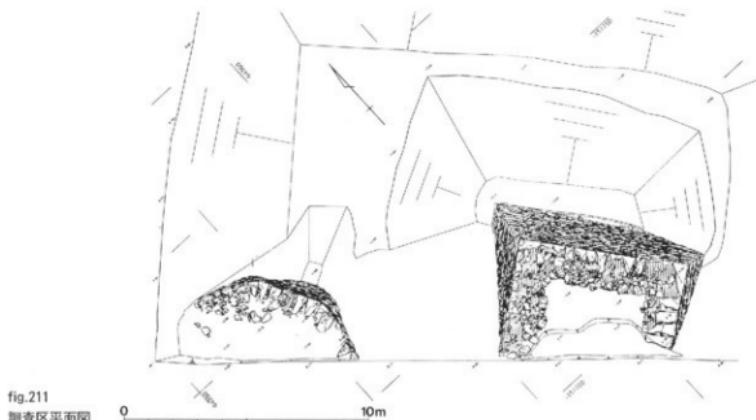
その他の施設

石垣の後方（北側）についても調査区を設定し調査を実施したが、砲台石垣に取り付く

土塁や諸施設の存在を示す痕跡は検出されなかった。

3. まとめ これまでの4次にわたる調査によって、舞子砲台の石垣総延長のうちの約6割にあたる部分について保存状況が確認された。これにより砲台の全長は東西70m、南北20mで基底部からの高さ6.0m、上端の幅6.0~6.7mをはかり江戸時代の城郭石垣にはみられない幕末期の特徴をもつことが確認できた。

なお、本調査の詳細な成果については、平成18年3月刊行の『舞子砲台跡－第1～4次発掘調査報告書』を参照されたい。



32. 西区No.151遺跡 第1次調査

1. はじめに

明石川中流右岸に位置する今回の調査地は、現在、西区No.151散布地として遺跡分布地図に掲載されており、遺跡の実態が長らく不明の遺跡であった。

調査地の北西の段丘上には弥生時代前期の遺跡として著名な青田遺跡、東には森友遺跡、北には堺町遺跡・出合遺跡が位置し、また、南には奈良～平安時代の掘立柱建物群で著名な吉田南遺跡や片山遺跡が拡がる。



2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う発掘調査である。調査区は「ロ」の字状のトレチと、一辺約0.6mのグリッド6箇所が調査の対象となった。

なお、調査地の標高は9.4mで北から南への緩やかな傾斜地に位置する。

基本層序

上層より、盛上・搅乱、灰褐色砂質土（土師器・弥生土器を含む）、灰褐色極細砂シルト（第1遺構面 弥生土器を含む）、淡灰色極細砂シルト（第2遺構面 弥生土器考含む）、黄色極細砂シルトである。第2遺構面の遺構底面の黄色極細砂シルト層より切り込む遺構はあるものの、第2遺構面の遺構に伴う落ち込みの可能性も考えられる。

遺物を含む灰褐色砂質土層は、浅い所で地表面よりわずかに0.3mで確認している。

遺物の整理が進んでいないので確定できないが、弥生時代前期～古墳時代前期の遺物が含まれておらず、なかでも弥生時代後期の土器が最も多かった。

第1遺構面

灰褐色極細砂シルト層より切り込む土坑3基、溝3条、ピット8基を検出した。

第2遺構面

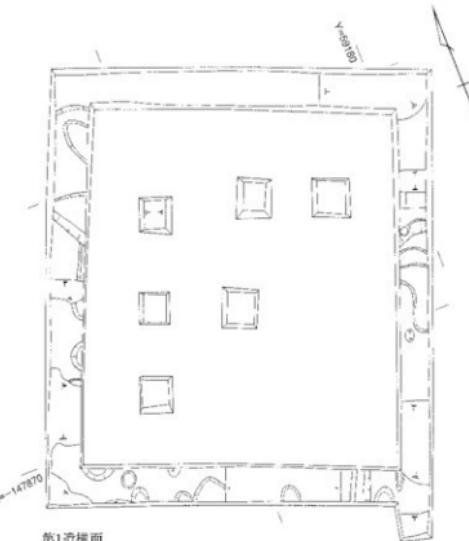
淡灰色極細砂シルト層より切り込む堅穴住居の可能性が考えられる落ち込みが2基、土坑3基、ピット3基を検出した。

S X201 S X201は、長さ3.9m、深さ30cmを測る。底面は平坦で、炭化層を含む土坑をもつ。弥生時代後期の遺物を多く含み、遺構の立ち上がりから考えて堅穴住居である可能性が考えられる。
S X203と切り合う。

S X202 S X202は深さ30cmを測る落ち込みで、底面時平坦で、底面より切り込む土坑を2基検出した。遺構の立ち上がりから考えて、堅穴住居の可能性が考えられる。

S X203 S X203は深さ40cmを測る。底面は平坦で、弥生土器が多く出土している。S X201に切られれている。

3. まとめ 今回の調査は、調査範囲が非常に狭いものであったが、遺物は28ℓコンテナで5箱分と非常に多く出土しており、今まで様相が明らかでなかった遺跡を解明する貴重な成果を得ることができた。



第1遺構面

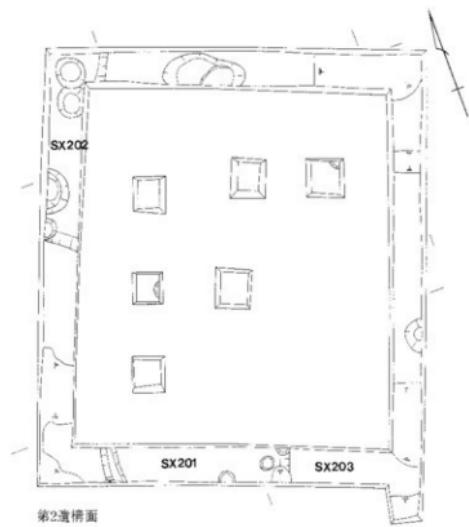


fig.214 調査区平面図

IV. 平成16年度の通常事業に伴う発掘調査

1. 西郷古酒蔵群 第3次調査

1.はじめに

西郷古酒蔵群は六甲山系東半南麓の海岸線近くに立地する遺跡である。平成8年度に実施された「沢の鶴大石蔵」(第1次調査)の発掘調査を契機とし、六甲山系南麓の酒蔵群は神戸の近世以降の歴史を解明する上で特に重要であると改めて認識されるようになった。現在までに酒蔵の発掘調査は神戸市内では9回目、西郷古酒蔵群内では平成9年度の「月桂冠北蔵」での調査に統いて3回目である。

今回の調査区は、平成7年の阪神淡路大震災で倒壊してしまったが、「甲蔵」・「乙蔵」・「西藏」・「旧大邑氏所有蔵」(震災当時は貯酒庫と呼称。)の重ね蔵形式の木造の酒蔵が4組存在していた。また敷地東側の倉庫には「東蔵」の名称を持つものもあったため、ここにもかつて重ね蔵形式の木造の酒蔵が存在していた可能性が容易に考えられた。

これらの中でも特に「旧大邑氏所有蔵」は阪神淡路大震災をも耐えた極めて数少ない現存する木造の酒蔵であった。

当該地において試掘調査を実施した結果、敷地の凡そ北側半分と南側の一部で江戸時代にまで遡る古い木造の酒蔵の存在が判明した。南側で確認されたものを除き、それらはそれぞれ「甲蔵」・「乙蔵」・「西藏」・「旧大邑氏所有蔵」の築造時のものであると考えられたが、その他に敷地の東側でも古い木造の酒蔵の所在が明らかとなった。



2. 調査の概要

試掘調査の成果を受け、計画された建物の基礎部分のうち、工事によって影響を受ける古い酒蔵が所在する範囲に関して発掘調査を実施することとなった。

調査区の名称は東西方向の基礎の部分を北側からA～Cトレチ、南北方向の基礎の部分を西側からD～Fトレチと呼称した。また地区名として所在していた酒蔵の名称である「甲蔵」・「乙蔵」・「西藏」の他、「旧大邑氏所有蔵」を「大邑蔵」、新たに所在が確

認された敷地東側の酒蔵を「東蔵」(以下「」省略。)とし、トレンチ名と併用して詳細な位置を示せるようにした。

基本層序

江戸時代後期に木造の酒蔵が築造されて以降、基本的にずっとその酒蔵で醸造が続けられるか倉庫等に使用されていた。解体の最も古い例では大正12年に甲蔵を解体して鉄筋の酒蔵が新築され、最も新しい例では今年度に大邑蔵が解体されている。このように実際に個々の酒蔵の解体には最大約80年の時間差が考えられるが、これらの時間差を実際の層序で確認して調査を進めることはできなかった。従って、土間に貼られた酒蔵の床面、酒蔵の種々の構造はすべて近現代の整地土もしくは攪乱の下で検出したことになる。しかし一部分、乙蔵の下層からは西蔵築造以前の状況が確認できたため、参考としてその部分の上層図は提示しておくこととする。

検出遺構

検出した遺構は酒蔵の十間貼の床面、外面の石垣及び壁体、石垣の直ぐ前に埋設された土管、槽場、石垣を持つ地ド室、礎石列、焼土と炭の堆積がある。以下それぞれの酒蔵ごとに記述していく。

甲蔵

Aトレンチのはば中央から西寄、Eトレンチにかけての範囲に所在した酒蔵である。社史によると明治43年に新築された酒蔵がこれに相当すると考えられる。

前蔵は早くに解体されていたが、重ね蔵形式の酒蔵であることは阪神淡路大震災以前に作成された酒蔵の配置図（神戸大学工学部黒田龍二先生作成、以下同じ。）から明確であつ

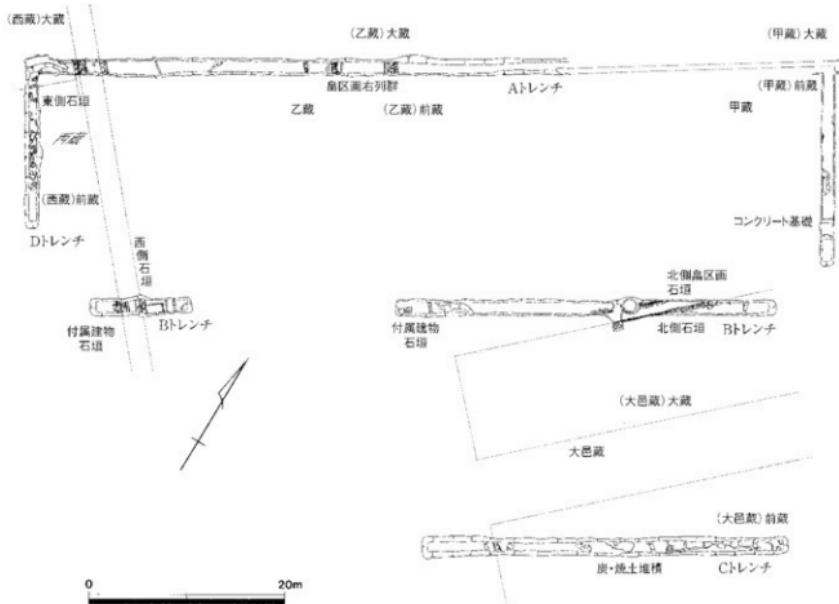


fig.216 検査区平面図(西藏・甲蔵・乙蔵・大邑蔵)

た。試掘調査でも前蔵の東側石垣や前蔵内部に構築された槽場と煉瓦組造構を確認しているが、今回の調査では大蔵の東側石垣を検出したのみで、前蔵の南側石垣等は後世に削平されて消滅したのか確認されなかった。

大蔵と前蔵の西側石垣も確認されなかったが、これは試掘調査でも確認されていない。阪神淡路大震災以前の配置図を見ると甲蔵の西端と乙蔵の東端は一致しており、計画的に設計・築造された可能性が高く、本来存在しなかったものと思われる。またEトレンチの下層からは旧耕作土状の土が広く分布していたが、酒蔵の築造以前は畠であったことを示している。

大蔵東側石垣 Aトレンチで検出した石垣である。最下段の根石に相当するものしか遺存していなかったため本米の高さは不明である。前面幅40~60cmの花崗岩の自然石を3石分検出した。

約60cm東側に土管を埋設した上に並べられた石列があり、これも甲蔵に伴うものの可能性があるが、甲蔵築造当初から存在した土管と右列であるかどうかは不明である。

コンクリート基礎 Aトレンチに重複する状態と、Eトレンチの南寄りでコンクリートの基礎を検出した。これらは社史に記載されている大正12年に新築された甲蔵の基礎であると考えられる。

乙蔵

Aトレンチの西寄り、3分割された西側のBトレンチにかけての範囲に所在した酒蔵である。社史によると大正9年に新築された酒蔵がこれに相当すると考えられる。重ね蔵形式の酒蔵で、甲蔵同様に試掘調査でも前蔵の西側石垣や前蔵内部に構築された煉瓦組造構を確認しているが、今回の調査では前蔵の大部分は調査対象範囲には入らなかった。阪神淡路大震災以前に作成された酒蔵の配置図から見て大蔵と、前蔵が南側に張り出す部分の東側石垣を検出したのみである。大蔵と前蔵の東側石垣も確認されなかったが、これは甲蔵でも述べたように本来存在しなかったものと思われる。またAトレンチの下層からは旧耕作土状の土が広く分布していたが、酒蔵の築造以前は畠であったことを示している。

大蔵西側石垣 Aトレンチで検出した石垣である。最下段の根石に相当するものしか遺存していなかったため本米の高さは不明である。前面幅40~50cmの花崗岩の自然石を4石分検出した。

前蔵西側石垣 Bトレンチで検出した石垣である。最下段の根石に相当するものしか遺存していなかったため本来の高さは不明である。前面幅50~60cmの花崗岩の自然石を3石分検出したが、石材は大蔵の西側石垣とはほとんど同じ大きさである。震災以前の配置図によるとこの部分は前蔵の西端が南側に張り出す部分であり、釜場もしくは井戸覆屋、あるいは槽場の一部分の可能性が考えられる。しかしこの張り出し部分にも立派な石垣が構築されていること

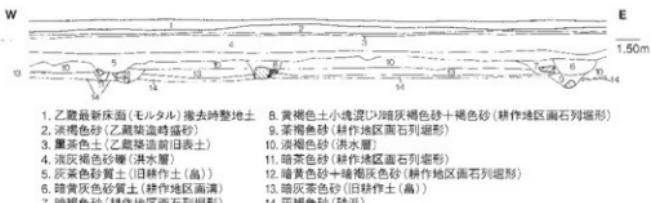


fig.217 乙蔵大蔵断面図

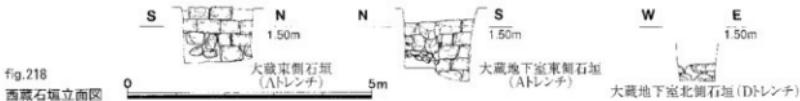


fig.218
西藏石垣立面図

から、この張り出し部分は後世に拡張されたのではなく、前蔵築造当初から存在していたものと考えられる。

西藏

Aトレンチ西端からDトレンチ及びそれ以西の範囲に所在した重ね壁形式の酒蔵である。社史によると昭和43年に取得した酒蔵がこれに相当すると考えられる。試掘調査では前蔵の西側石垣や北側石垣、前蔵内部に構築された釜場や槽場、礎石の根石を確認しているが、今回の調査では酒蔵の大部分が調査対象範囲には入らなかった。

遺構は人蔵の東側石垣とその石垣の内部に構築された地下室、土間貼の床面、前蔵南側の付属建物の東側石垣を検出した。しかしDトレンチで人蔵と前蔵の境界部分が明らかになる予定であったが、今回は確認できなかった。またAトレンチの西端で酒蔵築造以前の石垣を検出した。

大蔵東側石垣 Aトレンチで検出した右垣である。石垣として機能している部分としては4段分、高さ1.1mを確認したが、ちょうど検出した石垣の南側半分は、本来石垣の内側になる部分を石垣の構築と同時に大蔵内部に構築された地下室の東側石垣の表面とする状態で積まれているため、その部分はさらに下方へ積まれている。右垣の最下段は根石に相当するもので、前面幅約50cmの花崗岩の自然石である。それより上の段は前面幅30~60cmの花崗岩の間知石である。石垣の背後には酒蔵築造当初と考えられる床面が遺存しているため、石垣は築造当初の高さを残しているものと考えられるが、尖われている壁材の下にもう1石延石を積んでいた可能性は残る。

石垣の外側には少し小さめの石材を利用して雨水枠が構築されていた。

大蔵地下室 Aトレンチで検出した大蔵石垣の内面を東側石垣とした地下室である。北側石垣はDトレンチの北寄で検出されたが、Dトレンチは搅乱が著しいため南側石垣は既に破壊されてしまったよう検出されなかった。地下室内部の大半は調査対象範囲外になっており地下水の湧水が極めて著しかったため、深さや性格は不明である。

東側石垣は、地下室部分としては3段分、深さ70cmを検出したが、その上に人蔵東側石垣が2段分積まれている。石材は前面幅40~50cmの花崗岩の間知石であるが、大蔵の東側石垣程には加Tされていない。北側石垣は石材の前面幅は東側とほぼ同じであるが、間知石ではなく自然石を積んでおり、石材と石材の間には暗黄色の粘土の目地を詰めている。石種はすべて花崗岩である。

大蔵床面 Aトレンチの大蔵の東側石垣背後で検出した土間貼りの床面である。土間は淡黄色の二和土で、貼り直された痕跡が確認できなかったためおそらくは人蔵が築造された当初の上間であると思われる。

付属建物石垣 Bトレンチで検出した石垣である。震災以前の酒蔵の配置図ではこの部分には前蔵は及んでいないはずであるが、前蔵の東側石垣の存在が予想される延長線上で検出したため、

西藏に付属する建物の東側石垣と考えられる。遺存状況が悪く、最下段の根石に相当するものしか遺存していなかったため本来の高さは不明である。前面幅約30cmの花崗岩の自然石を4石分検出したが、やはり付属建物は酒蔵本体よりも幾分小振りの石材を使用しているようである。

大邑蔵

3分割された中央のBトレンチの東半以南からCトレンチのほぼ全面、さらにもう少し南側にかけての範囲に所在した酒蔵である。阪神淡路大震災でも倒壊を免れた酒蔵は、大邑氏所有当時の絵が描かれていて重ね蔵形式の酒蔵であることまでは判明していたが、大蔵に相当するのか前蔵に相当するのか不明であった。しかし試掘調査で前蔵を確認したため大蔵に相当することが明らかとなった。

社史によると明治42年に購入した酒蔵で、またかつてこの酒蔵の二階には明治2年銘と6年銘の生駒山寶山寺の祈願札が打ち付けられていたため、少なくとも酒蔵の築造年代は明治2年以前であることが確認されている。今回の発掘調査では酒蔵の大部分が調査対象範囲には入っておらず、大蔵の北側石垣と前蔵の西側石垣、前蔵内部の焼土と炭の堆積、付属建物の石列を確認した。また試掘調査では土間貼りの床面を確認していたが、本調査では確認されなかった。

大蔵北側石垣

Bトレンチ東半で検出した石垣である。3段積で長さ9.8m、高さ0.7~0.9mを確認したが、確認した東側半分は解体の際に損傷しており遺存状況が悪かった。ただ丁度その部分にやや東方向に傾斜する縦方向に目地が通る部分があること、その部分で石垣の高さが変化することから、その目地の部分以東が先に存在していた酒蔵で、それ以西を後から拡張した可能性が高い。しかし床面相当部分は調査範囲外で、平面的には酒蔵の拡張を確認することはできなかった。



fig.219
大邑蔵大蔵北側石垣



fig.220 大邑蒸石垣立面図

石垣の最下段は根石に相当するもので、前面幅30~60cmの花崗岩の自然石である。それより上の段は前面幅40~50cmの花崗岩の間知石であるが、拡張されたと考えられる部分ほど加工の程度が高い。試掘調査では石垣の背後に床面が遺存していることを確認しているため、石垣は築造当初の高さを残しているものと考えられるが、失われている壁材の下にもう1石延石を積んでいた可能性は残る。

また石垣の北側で平行する別の石垣を検出した。しかしこの石垣の石材は人頭大の花崗岩の自然石を積んでおり、石垣の背後には旧耕作土状の土が広く分布していることが確認された。地籍図からは北側が畠であることが判明しており、これを裏付けたことになる。

前蔵西側石垣 Cトレンチの西寄で検出した石垣である。2段分を確認したが、2段目は壁面から一部分見えていているのみで、ほとんど最下段の根石に相当するものしか遺存していない状況のため本来の高さは不明である。前面幅30~50cmの花崗岩の自然石を3石分検出したが、石材は大蔵の北側石垣とほぼ同じ大きさである。

前蔵焼土・炭 Cトレンチのほぼ中央で検出した焼土と炭の堆積である。従ってこの付近に釜場が存在した可能性が極めて高い。しかし焼土は細かく碎かれており、元の竈の状態を全く留めていない。また堆積の中には現代の遺物が全く含まれていなかったため、少なくとも前蔵を解体したときに竈を破壊したことは考えられない。通常重ね蔵形式の前蔵には東西両側に釜場と槽場が構築されおり、詳細な時期は不明であるが前蔵の釜場を新しく改修した時に古い竈を破壊したものと考えられる。

付属建物石列 Bトレンチ西端で検出した建物の石列である。試掘調査の際にはこれらの他に大蔵の西側の位置で建物の石列を検査している。これらの個々の具体的な性格は不明であるが、社史には大邑氏から酒蔵を購入した敷地の中には酒蔵に付属する建物も数棟建てられていたことが判明しているため、これらがそのうちの何れかに対応するものと思われる。石材はすべて花崗岩である。

東蔵

Aトレンチの東端以南からFトレンチ、3分割された東側のBトレンチの中央以東、さらにもう少し南側にかけての範囲に所在した酒蔵である。この酒蔵は周知の文化財として把握できていなかった古い木造の酒蔵で、今回始めて存在が確認されたものである。現在この酒蔵の名称は不明であるが、ここでは仮に東蔵と呼称する。

他の酒蔵同様に酒蔵の大半は調査対象範囲には入らなかったが、重ね蔵形式の酒蔵であることが判明した。しかし今回確認した重ね蔵はかなり変則的で、前蔵と大蔵がきちんと並立する状態では確認されなかった。大蔵の南側のFトレンチと3分割された東側のBトレンチで部分的に前蔵の石垣を検出したが、前蔵の南側が屈曲するのではなく、石垣の段数や積み方の違いから築造された当初は別々の建物であり、その2棟を重ね蔵形式のよう

に使用していたものと考えられる。従ってここでは東前蔵、西前蔵と呼称しておく。

遺構は大蔵の南北両側石垣、土間貼の床面、東前蔵の東側石垣と南側石垣、土間貼の床面、西前蔵の東西両側石垣と東側石垣の内部に構築された地下室、土間貼の床面、檣場、礎石列を確認した。

大蔵北側石垣 Aトレンチ東端で検出した石垣である。3段積で長さ11.6m、高さ0.9mを確認したが、確認した東側半分には芯に煉瓦を積んで表面にモルタルを塗った壁材が遺存していた。この壁材の煉瓦は大正14年に設定された規格に合致するものである。石垣の最下段は根石に相当するもので、前面幅30~70cmの花崗岩の自然石である。それより上の段は前面幅30~100cmの花崗岩の間知石である。中心となる大きさは40~60cmのものであるが、大きさのばらつきが大きい。

石垣北隣の地面上には大正14年の規格に合致しない煉瓦を敷き詰めていた。しかし煉瓦の下には石垣構築後に堆積した表土が薄く存在していたため、大蔵築造以後のある時点で敷き詰められたものであることが判る。煉瓦はほとんどが破片で、中には目地の粘土が付着していたものがあったため、煉瓦で構築されていた何かを解体した時の廃材を転用したものと判断される。しかし焼損した煉瓦や耐火煉瓦は1点も含まれていなかったため、釜場に使用されていた煉瓦とは考えられない。

また石垣の北側で平行する別の石垣を検出した。しかしこの石垣の石材は大きさも不揃い、加工程度も一定せず、種類も花崗岩ばかりではなく竜山石も含まれていた。積み方も粗雑で、石材と石材の隙間が大きい部分もあり、とても建物の石垣とは考え難い。石垣の背後は調査対象範囲外となるため不明であるが、地籍図ではこのあたりは畠であったようで、この石垣も畠南側の段差の石垣としておきたい。

大蔵南側石垣 Fトレンチ北寄で検出した石垣である。2段分を確認したがその上の搅乱の中には遊離した石材が存在するため構築当初はもう1段積まれていた可能性もある。しかし現状の石垣

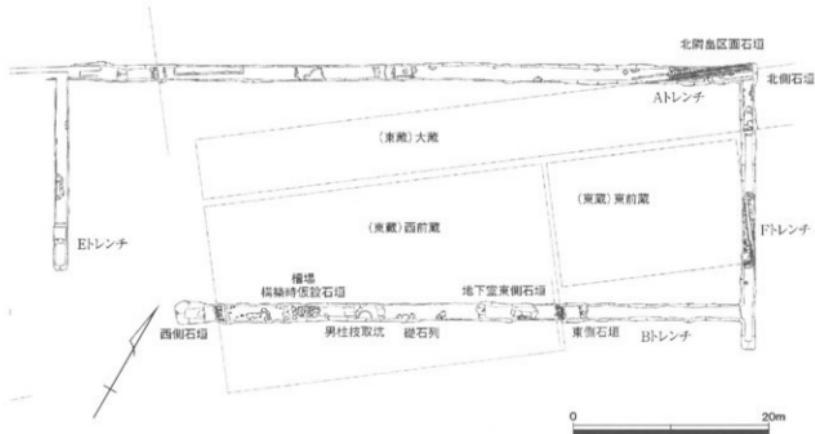


fig.221 調査区平面図(東蔵)

の上端と北側石垣の上端の水準が一致するため、当初から2段積であった可能性もある。石垣の上には既に失われている壁材との間にもう1石延石を積んでいた可能性も残っている。現状で高さ0.6mである。石垣の下段は根石に相当するもので、前面幅約50cmの花崗岩の自然石を4石並べ、上段は前面幅40~50cmの花崗岩の間知石を4石並べている。

また石垣の直ぐ南側で直径約25cm、長さ約30cmの土管を錐ぎ合わせた埋設管を検出した。土層観察によると石垣を構築した直後に埋設されたようで、機能し始めた時期は石垣とあまり差はないようにも思われる。

大蔵床面

Aトレーニチの大蔵の北側石垣背後からFトレーニチの大蔵の南側石垣の背後で検出した土間貼りの床面である。土間は淡黄色の二和土で、貼り直された痕跡が確認できなかつたため、おそらくは大蔵が築造された当初の土間であると思われる。

東前蔵東側石垣

Fトレーニチ中央で検出した石垣である。4段分で長さ7.1m、高さ1.3mを確認したが、石垣の南端から見て2.6~4.3mの部分は3段積に変化している。またその部分の両端には継方向の目地が通っている。石垣の解体の結果この部分は積み直された石垣であり、背後には地下室が存在していた。

当初の石垣が遺存している部分では最下段は根石に相当するもので、前面幅50~60cmの花崗岩の自然石である。それより上の段もあり加工された石材ではなく、最上段のみ石垣の表面になる部分を少し加工している程度である。前面幅も30~60cmと不揃いで、石材の長軸方向が縦に積まれているものもある。積み直された部分は3段積で、両側の部分は花崗岩の間知石を3段共に積んでいるが、その他の部分は花崗岩の自然石である。前面幅も30~50cmと不揃いで、石材の長軸方向が縦に積まれているものもある。石垣の背後には酒蔵築造当初と考えられる床面が遺存しているため、石垣は築造当初の高さを残しているものと考えられるが、失われている壁材の下にもう1石延石を積んでいた可能性は残る。

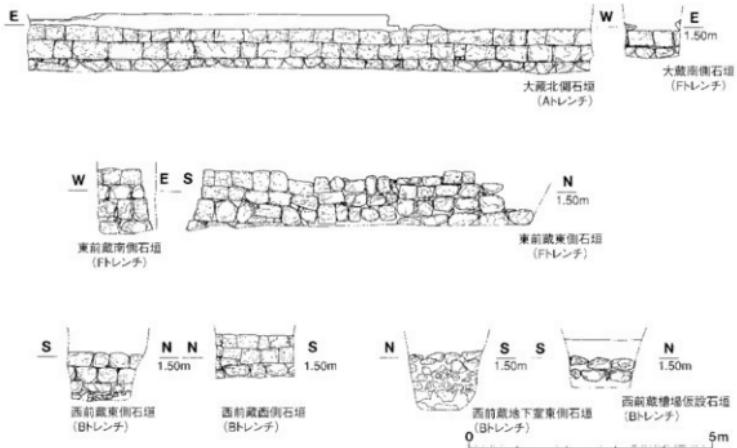


fig.222 東蔵石垣立面図

東前蔵南側石垣 Fトレーナー中央で検出した石垣である。4段分、高さ1.3mを確認した。最下段は根石に相当するもので、前面幅40cmと60cmの花崗岩の自然石が2石並べられている。それより上の段もあり加工された石材ではなく、最上段のみ石垣の表面になる部分を少し加工している程度である。

前面幅も40~50cmと不揃いで、石材の長軸方向が縦に積まれているものもある。石垣の背後には酒蔵建築当初と考えられる床面が遺存しているため、石垣は建築当初の高さを残しているものと考えられるが、失われている壁材の下にもう1石延石を積んでいた可能性は残る。

東前蔵地下室 Fトレーナー中央の、東前蔵東側石垣の背後で検出した地下室である。遺存状況が極めて悪いこと、地下室の大半が調査対象範囲外に位置することから東前蔵東側石垣を解体した際の壁面観察で埋め立てられていた状況が確認されたのみである。本来存在した地下室の石垣も損壊が著しく、南側の上部約60cmが壁面上に遺存していた。本来前蔵に所在する地下室状の構造は槽場か釜場の焚口作業場が考えられるが、既述のように東前蔵は本来前蔵として建築されていなかった可能性もあるため地下室の性格は不明である。

東前蔵床面 Fトレーナーの東前蔵の東側と南側の石垣背後で検出した土間貼りの床面である。土間は黄色系の二和土であるが、最低2回は貼り直されている。1回目は地下室を埋め立てた時で、地下室以北に貼られており、2回目は地下室より南側に貼られている。

西前蔵東側石垣 Bトレーナーの東寄で検出した石垣である。3段分、高さ0.8mを確認した。最下段は根石に相当するもので、前面幅60cmの花崗岩の自然石が3石並べられている。それより上の段は前面幅40~60cmの花崗岩の間知石である。西側石垣とは現状の上端の水準が約30cm低いため、最低もう一段は積まれていたと考えられる。根石のさらに下には拳大の花崗岩の礫が多く検出されたが、この石垣の背後に地下室の東側石垣が積まれていたため、その石



fig.223

東蔵西前蔵東側石垣

垣の裏込に相当する礎と考えられる。

西前藏西側石垣 Bトレンチの西端で検出した石垣である。3段分、高さ0.9mを確認したが、確認した北端では4段積に変化していた。最下段は根石に相当するもので、前面幅30~60cmの花崗岩の自然石が5石並べられている。それより上の段は前面幅30~50cmの花崗岩の間知石である。西側石垣と比較して加工の程度が高い。

石垣の背後には酒蔵築造当初と考えられる床面が遺存しているため、石垣は築造当初の高さを残しているものと考えられるが、失われている壁材の下にもう1石延石を積んでいた可能性は残る。

西前藏地下室 Bトレンチ東寄の、西前藏東側石垣の背後で検出した地下室である。東側の石垣を確認したが、西側の石垣は攪乱で破壊されているため検出されなかった。また他の地下室同様に地下水の湧水が極めて著しく、地下室の底面まで掘り下げることはできなかった。東側石垣は6段分、深さ110cmを検出したが、上部4段分の石材は小振りである。

西前藏床面 Bトレンチの西前藏の西側石垣背後で検出した土間貼りの床面である。土間は暗黄色の二和土で、貼り直された痕跡が確認できなかったためおそらくは大蔵が築造された当初の土間であると思われる。

西前藏槽場 Bトレンチの西寄で検出した槽場である。試掘調査では床面から一段下がって半地下室状となる石垣も確認したが、本調査では大半が調査対象範囲外となっているため男柱抜き取り坑を検出したのみである。

しかもその部分に近代の石材投棄坑が掘り込まれているため男柱下部の横木の痕跡や枕石は確認できなかった。抜き取り坑の東側には男柱掘え付け坑の崩壊を防止する仮設の石垣が2段分検出された。この石垣は高さ約0.5mで石材は前面幅40~50cmの花崗岩の自然石で、石材と石材の隙間が大きく丁寧には積まれていない。



fig.224
東蔵東前藏南側石垣

西前蔵礎石列 Bトレントのはば中央で検出した礎石列である。3基分を確認したが、その延長部分は調査範囲対象外に続いている。礎石本体は建物解体時に抜き取られてしまっていたが、中央の礎石には根石と礎石本体を接着していた淡黄色の粘土が遺存していた。

根石は長さ40~60cm、高さ20~30cmの花崗岩の自然石を三角形に置き、その上に長さと幅70~80cm、高さ約20cmの花崗岩の板石状の自然石を置いている。その上に本来は礎石本体が置かれていた。礎石の間隔は約3.9mで、13尺に相当すると考えられる。

3. まとめ 西郷古酒蔵群はこれまでの2回の調査のいずれでも江戸時代に築造された酒蔵が何回もの改修を繰り返されながら、現在まで使い続けられていた状況が解明されている。

今回の発掘調査はトレント調査という制約のため酒蔵を面的に広く調査できてはおらず、詳細な酒蔵の構造変遷は追跡できていない。しかし調査の結果、江戸時代と明治時代に築造された5組の重ね蔵形式の酒蔵が、現代まで使われ続けていた状況が確認された。

甲乙両酒蔵はそれぞれ明治時代と大正時代に築造された酒蔵であるが、計画的配置が伺われるため明治時代に同時に設計されていた可能性が高い。

大正9年に集成された地籍図では建物が建っていた部分は緑色で、面積が坪数で表記されている。一方畠や荒地の部分は黄色で、面積が○○畠○○坪で表記されている。地籍図上で甲乙両酒蔵が該当する部分は黄色であるため、少なくともこの地籍図が作成された時点では畠であったことになる。社史などの記載でも、やはり酒蔵は存在していなかったことを伺わせる。そして発掘調査でも酒蔵の下層から明治時代の遺物を含む旧耕作土を検出しているため、以上の状況から甲乙両酒蔵は明治時代になって初めて築造された酒蔵であると判断される。

西藏は搅乱が著しいため、遺構の遺存状況が極めて悪い。しかし試掘調査では前蔵の西側石垣の前面堆積には明治時代の遺物が全く含まれていない状況を確認しているため、築造時期は確実に江戸時代にまで遡ることが明らかである。同様に試掘調査で確認した壇は石組であったこともそれを補強する。月桂冠が西藏を取得したのは30数年前であるが、酒蔵自身は江戸時代から使われ続けていたことになる。

大邑蔵は2枚の祈願札から明治2年には既に存在していたことが明らかで、前蔵は古くに解体されてはいたものの、今回やはり重ね蔵形式の酒蔵であったことが明らかとなった。しかし調査の結果大蔵が拡張されている可能性が高いこと、前蔵も改修された痕跡が確認できたことから、築造時期は江戸時代になることはほぼ確実である。

また大蔵の下層を断ち割っても明治時代の遺物は全く出土しなかった。大邑氏がこの酒蔵を築造したのかどうか確認する資料は現時点では存在しないが、この酒蔵も江戸時代に遡る古い酒蔵であることが明らかとなった。

東蔵は試掘調査で始めて存在が明らかとなった酒蔵である。重ね蔵形式の酒蔵ではあるが、極めて変則的な配置となっている。大蔵は非常に狭長で、しかも建物の東端は前蔵の東端と一致していない。前蔵は東西2棟の建物で構成されており、しかも建物の南端は一致していない。従ってこれら3棟は重ね蔵形式同時に築造されたものとは考え難い。調査では3棟が築造された順序までは明らかにならなかったが、大蔵が狭長であることが築造された順序を示唆しているようである。

即ち先に存在した2棟の建物を前蔵として使用するため、北側の空いていた土地に大蔵を築造したが、最低限の建物面積を確保するために前蔵の東端を越えてさらの東方へ延びて建てられたと推定できる。3棟共に石垣を解体して築造された当時の基盤層まで掘り下げたが、建物内部の盛砂や基盤層からは江戸時代の遺物しか出土しなかった。従って東蔵も江戸時代に遡る古い酒蔵であることが明らかとなった。現状では大蔵の北側石垣の上には大正14年に設定された規格に合致する煉瓦で壁が造られているが、大蔵の築造が江戸時代であるため後世に積み直されたものと判る。

以上、敷地の中に5組もの酒蔵が存在していた事実が確認された成果は大きい。しかも少し変則的なものも含まれるが、それらはすべて酒蔵の理想形と考えられている重ね蔵形式の酒蔵であった。

当該地の北隣にも複数の酒蔵がかつて存在しており、西隣や道路を挟んださらに西隣にもかつて複数の酒蔵が存在していた。寛政5（1793）年には新在家の蔵元として米屋庄兵衛・花木屋長兵衛・花木屋新七・上坂屋五右衛門・若林屋左衛門等々の名前が確認でき、22,239石の米で醸造していることが判っているが、まさに当該地一帯はその頃以降から西郷の中心地であったといえよう。

今後も酒蔵の調査事例を積み重ね、江戸時代の神戸の発展の過程を明らかにしていかなければならぬが、その中でも酒蔵が密集する場所で、同時に複数の酒蔵の実態が明らかにできた意義は大きい。

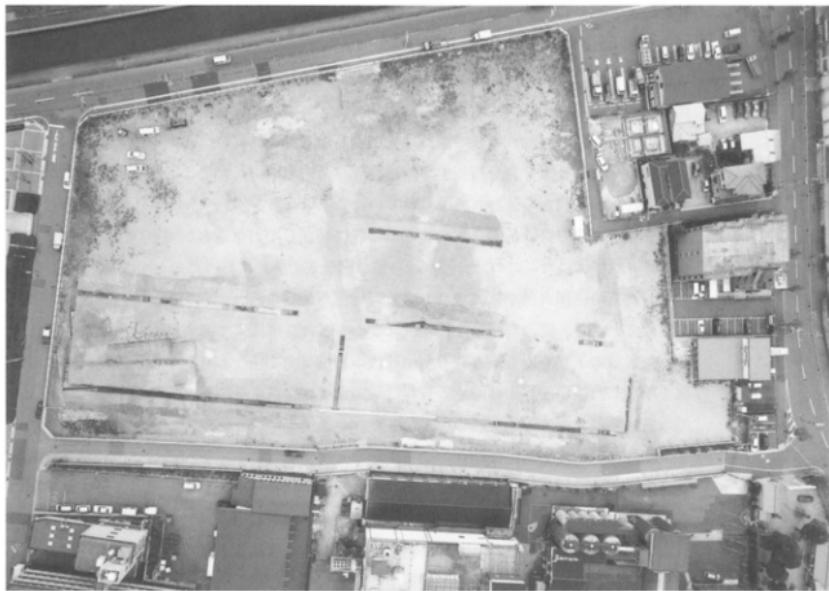


fig.225 調査地全景

2. 西求女塚古墳 第15次調査

1. はじめに

現在の神戸市街がひろがる六甲山南面の平野部は六甲山系を供給源とする複合扇状地が発達しており、西求女塚古墳はこの扇状地末端、標高約6mの微高地に築造されている。

これまでの調査では、平成5年の第5次発掘調査などで銅鏡をはじめとする豊富な副葬品が出土し、西求女塚古墳の年代が古墳時代初頭までさかのぼるものであることが判明した。また、墳形が前方後方墳であること、古墳の周囲には律令時代の存在した駿馬泊に関連するものと推測される遺構の存在することなども確認されている。

古墳近接地の調査は第3・4・6・8~11・14次の8回が実施されており、奈良時代末から平安時代初めの掘立柱建物・溝（第6・14次）、中世の柱穴・溝（第3・14次）、周隙状の落ち込み（第3・4・6次）が検出されている。

第14次調査ではS B01の状況等から西求女塚古墳の北側隣接地はレベルで50cm以上と大きく削平されていることが明らかとなり、これまでの調査、そして今回の調査で確認された浅い周隙が本来深いものであったことを推測できるようになった。



2. 調査の概要

今回の発掘調査は、第14次調査を行う原因となった建物建築が設計変更となつたため、追加してあらたに100m²について実施したものである。

中世の耕作痕・耕作地の区画石垣・柱穴・土坑、古代の柱穴・土坑、西求女塚古墳塚の周隙あるいはその痕跡と考えられる浅く広い落ち込み（SX03）などが検出された。

S X03

古墳の周隙あるいはその痕跡と考えられる浅く広い落ち込み。遺構の北限の立ち上がりは明瞭に確認できたが、底面は凹凸が多い。ここからは古墳に並べられた底部穿孔壺は出土しなかった。包含層・鋪溝などから4片のみ。

土坑・柱穴

古代あるいは中世の土坑が数多く検出されている。土坑はほとんどがプラン不整形のもので、混入したと考えられる程度の土器小片しか存在しないが、第14次調査時のS P61、今回のSK11・21などは平安時代末あるいは鎌倉時代の瓦器が完品あるいはそれに近い個体で出土している。

特にSK21などは土坑の底に置いた石の上に置いた須恵器壢り鉢片の上に正位で置いたというような状態で出土しており、興味深い。

鋤溝・石垣 鋤溝は古墳の主軸に沿う南西—北東方向のものだが直線的ではなく、それぞれが相似形で屈曲する。西向きの石垣は基本的に鋤溝に直交する方向に伸びる。方向の異なる石垣が検出されており、積み替えの行われていることが確認できた。

3. まとめ 前年の第14次調査の成果を追認するものとなった。当地は陸海の交通路が交差する地点であり、舟入あるいは港を管理する施設や倉庫、山陽道がここを通過するための入江あるいはこれに流入する河川を跨ぐ橋等の存在が予想される。古墳の北から西にかけての地域には入江を囲むかたちで、西求女塚古墳とは別の、交通また物流の要という性格を持つ遺跡が広がるとして推測されるだろう。

この遺跡については現在のところ西求女塚古墳と別個のものとして把握されておらず、その範囲も把握されていない。したがって古墳の周囲を除き遺跡としての認定すら行われていない現状がある。今回の調査によってこの遺跡の範囲がさらに北へ広がることが確認されたわけで、律令期を中心とし古墳時代から中近世につづく独立した遺跡としてここを認識し、その範囲を確認することが早急に望まれる。



3. 日暮遺跡 第23次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山南麓の扇状地末端から低位段丘面に立地している遺跡である。

これまでの発掘調査によって、古墳時代前期の堅穴住居、平安時代中期～鎌倉時代前半の掘立柱建物を含む集落跡が確認されてきている。



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に先立つもので、基礎杭等の施工が予定されている部分の10ヶ所について、表層を重機によって掘削した後、さらに人力掘削を行なながら、調査を実施し、埋蔵文化財の状況についての記録を作成した。なお、10ヶ所のうち2ヶ所は試掘坑と重複しているため、調査は省略した。

基本層序は擾乱・盛土の下層に、乳色細砂から構成される洪れ砂層が厚く堆積している。さらに、下層には淡乳色砂質土・暗褐色シルト質細砂の旧耕土と考えられる土層が統き、中世の遺物包含層である暗褐色シルト質細砂・弥生時代末～古墳時代前期の遺物包含層である淡黒褐色細礫混じりシルト質細砂に至る。基盤層は黒褐色シルト質極細砂～細砂である。

2区では東壁の断面で、直径45cm、深さ10cmのピットを1基確認した。出土遺物は確認できていないが、埋土が暗黄褐色シルト質極細砂で、鎌倉時代のものと考えられる。

3区では調査区の南西隅に鎌倉時代前半の落ち込みを、ほぼ中央で時期不詳のピット1基を確認した。落ち込みの平面形態・規模は明確にできないが、深さ最大15cmである。完形の土師器皿1点、瓦器皿2点、瓦器碗2点と陶器（産地不明）鉢片1点、滑石製温石片1点が拳大の花崗岩砾とともに出土している。ピットは直径22cm、深さ約25cmで、土師器小片が出土している。

7区では南壁の断面で、幅46cmのピットあるいは土坑状落ち込みを確認した。平面形についての確認ができていないが、完形の須恵器碗が1点出土している。さらに、下層の淡

黒褐色シルト質細砂から構成される遺物包含層が2層確認できることから、下層については遺構の埋土である可能性が高い。

なお、8区は隣接地からの湧水によって水没してしまい、土層断面等の確認は不可能であったが、他の調査区とおむね同様と考えられる。

3. まとめ 今回の調査は基礎工施工部分のみの限定的な調査であったにもかかわらず、鎌倉時代前半の土坑あるいは落ち込みが確認され、完形の遺物も出土し大きな成果をおさめることができた。また、弥生時代の遺物は量的には少量であったが、7区では遺構埋土も確認できたことから、当該期の遺構の拡がりも想定できる。

現状では遺跡の全容をまだまだ窺うことはできないが、周辺地域の発掘調査事例が増加すれば、さらに鮮明になるものと期待され、今後の調査の進展によって、遺跡の具体像が徐々に明らかとなるものと考えられる。

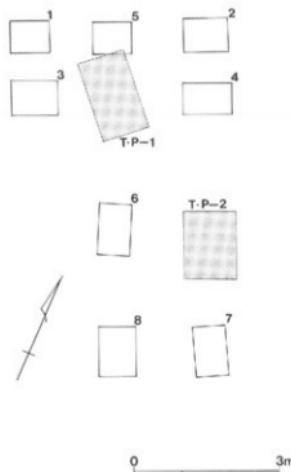


fig.229 調査区配置図

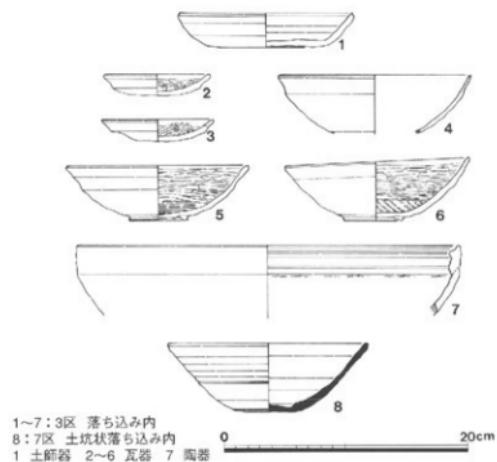


fig.230 出土遺物実測図

4. 雲井遺跡 第19次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、昭和62年度に再開発ビル建設に伴い発見された遺跡であり、現在までに18次にわたる調査が実施されている。これまでの調査では、縄文時代と弥生時代、古墳時代を中心とする幅広い時期で、遺構と遺物が確認されている。なお今回の調査地は、平成3年度に実施した第4次調査の西隣に位置している。

fig.231
調査地位図
1:2,500



2. 調査の概要

基本層序

今回の調査は、共同住宅の建設に伴うもので、基礎部分を調査対象としたものである。基本層序は搅乱盛土、淡灰色砂質土、暗灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土（この土層が存在する部分では上面が遺構面となる）、淡黄灰褐色砂質土（上面が遺構面となる）と続く。

暗灰褐色砂質土の上面では遺構の検出が困難であったため、すべて淡黄灰褐色砂質土の上面で、遺構の検出を実施している。あるいはこの暗灰褐色砂質土は、遺構面を覆う土壤化層であるかもしれない。

遺構と遺物

弥生時代中期後半の方形周溝墓や土坑の他、古墳時代後期の柱穴を確認している。

遺物は方形周溝墓から供獻土器が出土した他、柱穴から古墳時代後期の須恵器と土師器が破片で少量出土している。

S D01

調査区の東端で検出した。幅約60cmで、深さ約55cmを測り、ほぼ東西方向に延びる溝である。弥生時代中期の土器片が少量出土しているだけで、細かな時期は判断できていない。S D03と対になり、方形周溝墓となる可能性がある。

S D02

調査区の中央で検出した。幅約120cmで、深さ約75cmを測り、ほぼ東西方向に延びる溝である。対になる溝は調査区外に存在するため、検出していないが、方形周溝墓の周溝である。胴部に穿孔が認められる壺を含む、弥生時代中期後半の供獻土器の壺が3個体出土している。

S D03

調査区の東端で検出した。幅約36cmで、深さ約14cmを測り、ほぼ南北方向に延びる浅

い溝である。遺物は出土していない。SD01と対となり、方形周溝墓となる可能性がある。

S K01 調査区の西端で検出した。幅は東西約140cm×南北約75cmで、深さ約13cmを測る土坑である。弥生時代前期の土器片が少量出土している。

S K02 調査区の西端で検出した。幅は東西約40cm×南北約58cmで、深さ約8cmを測る土坑である。遺物は出土していない。

S K03 調査区の西端で検出した土坑である。土坑の西側は搅乱により削平され、北側は調査区外へと続いている。幅は東西約120cm以上×南北約80cm以上で、深さ約5cmを測る。遺物は出土していない。



fig.232 SD02 土器1



fig.233 SD02 土器3

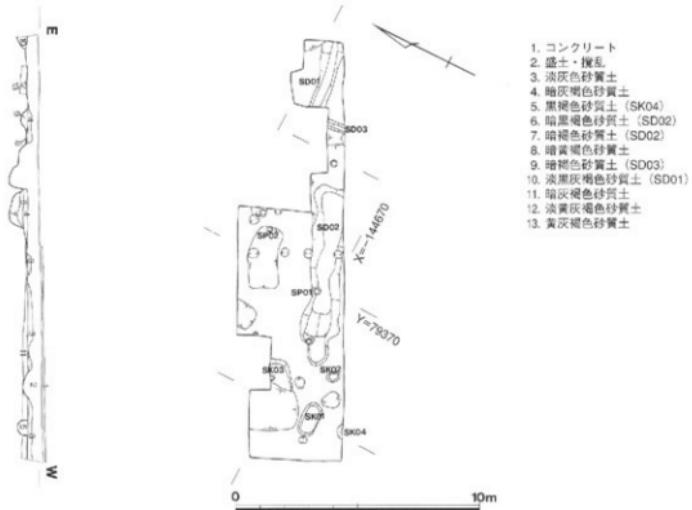


fig.234
調査区平面図・断面図

S K04 調査区の西端で検出した土坑である。土坑の南側は調査区外へと続いている。幅は東西約58cm×南北約20cm以上で、深さ約19cmを測る。遺物は出土していない。

柱穴 調査区の広範囲に散在する状況が確認されている。幅約22cm~32cmで、深さ約8cm~36cmを測る。

細かな時期を判断できる遺物は出土していないが、S P02は弥生時代中期後半の周溝墓であるS D02の埋没後に掘削され、須恵器も出土しているため、古墳時代後期の遺構である可能性が考えられる。ただし弥生時代前期の柱穴の混じっている可能性は否定できない。建物や柵列としての並びは確認していない。

3. まとめ 今回の調査では、弥生時代前期、中期後半と古墳時代後期の3時期の遺構が確認できた。

弥生時代前期には、土坑が確認されている。この時期の遺物が出土した土坑は1基だけで、他の土坑から遺物は出土していないが、すべて弥生時代前期の遺構である可能性も考えられる。過去の調査では、今回の調査区から南西約100mに位置する第1次調査地で、縄文時代晚期~弥生時代前期の土坑や柱穴多数が確認されたほか、本調査区の東側に接した第4次調査地でも弥生時代前期の土坑や柱穴多数が確認されている。また北東約200mに位置する第7次調査地でも、弥生時代前期の土坑や柱穴が確認されている。

霧井遺跡の広い範囲に、少なくとも縄文時代晚期~弥生時代前期へと続く集落が存在し

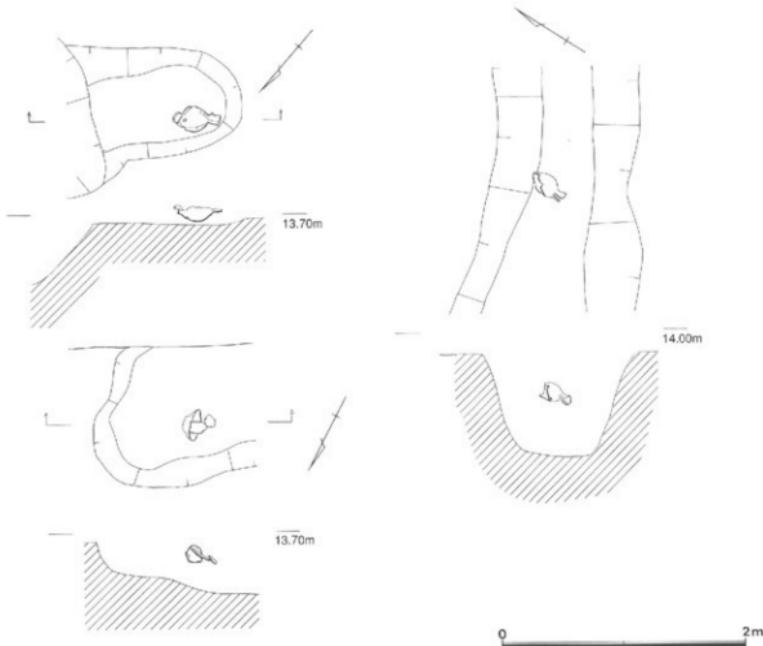


fig.235 S D02 土器 1~3 出土状況平面図・立面図

ていたことは確実である。

弥生時代中期後半には、1基ないし2基の方形周溝墓が確認されている。現在までの調査では、第1次調査で弥生時代中期後半の周溝墓や木棺墓が確認された他、北東約200mに位置する第8次調査地でも弥生時代中期後半の周溝墓が確認されている。弥生時代中期後半の墓域が、遺跡の広範囲に広がる状況も理解できる。弥生時代中期の居住域については、第8次調査地の南方約30mに近接した第7次調査で、掘立柱建物や土坑、ピットが確認されている。ただし他に検出例が乏しく、詳細は不明である。

古墳時代後期には柱穴が散在する状況が、確認されている。現在までの調査では、裏井遺跡の北東端部に近い第10次調査で古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物が検出され、集落の存在が確認されているほか、第13次調査でも古墳時代後期の溝や土坑が確認されている。また、第7次調査で古墳時代前期の溝が検出され、第8次調査で古墳時代後期～奈良時代の柱穴多数が検出されている。

これらの調査結果から、古墳時代前期に始まり、奈良時代まで続く集落が存在したことは確実であろう。今回の調査で検出した古墳時代後期の柱穴も、この集落の広がりを示す資料である。

また本調査区の東側に接した第4次調査地では、下層から縄文時代早期の遺構が確認されているが、今回は調査に先立つ試掘調査でその存在が確認されなかった。このため下層の調査は実施していない。



fig.236
調査区全景

5. 兵庫松本西遺跡 第1次調査

1. はじめに

兵庫松本西遺跡は、今回の工事に伴う試掘調査によって新たに確認された遺跡であり、六甲山系から流れる旧湊川をはじめとする幾つかの小河川によって形成された扇状地上に位置する。

この遺跡の東には、市営住宅建設に伴い平成10年度に発見された兵庫松本遺跡が存在し、縄文時代末から平安時代までの遺構・遺物が確認されている。この他にも周辺には楠・荒田町遺跡や上沢遺跡が存在する。



2. 調査の概要

基本層序

工事により遺跡の破壊される部分について発掘調査を行なった。

調査区の基本層序は、地表から50~60cmの表土・盛土の下に比較的新しい旧耕土が20cmほどみられる。さらに近世から中世のものと考えられる約40cmの耕土状の土層の下で遺構面である淡灰黄色シルト・灰黄色砂に至る。なお調査区の南側は少し落ち込んで暗灰褐色土が堆積する。

検出遺構

調査区の南側約4分の1は建物の基礎による搅乱により遺構検出面を越えて深く削平されている。

また遺構面は、西側が淡灰黄色シルト、東側が灰黄色砂層で構成されている。溝状の遺構が1条検出された。

S D01は南北に走る溝で幅60~80cm、深さ20cmを測る断面U字形の溝である。出土遺物は少なく時期は不明である。

下層

下層について断ち割り調査を実施したが、遺構面以下の層において僅かに縄文時代晩期から弥生時代前期と思われる遺物が含まれるものの中確な遺構は確認されなかった。

3. まとめ 今回の調査においては、遺物は確認されたものの明確な遺構は検出されなかった。検出されたSD01についても人為的なものではなく、自然流路が埋没していく最終段階の状態とも考えられる。遺跡の中心は、さらに周辺にあると考えられる。

当初は、兵庫松本遺跡が東側に拡大するものかとも考えられたが、現在の兵庫松本遺跡の範囲においては西側で希薄になり一端途切れる様相を示すことから、今回は別の遺跡であると判断した。



fig.238
調査区全景

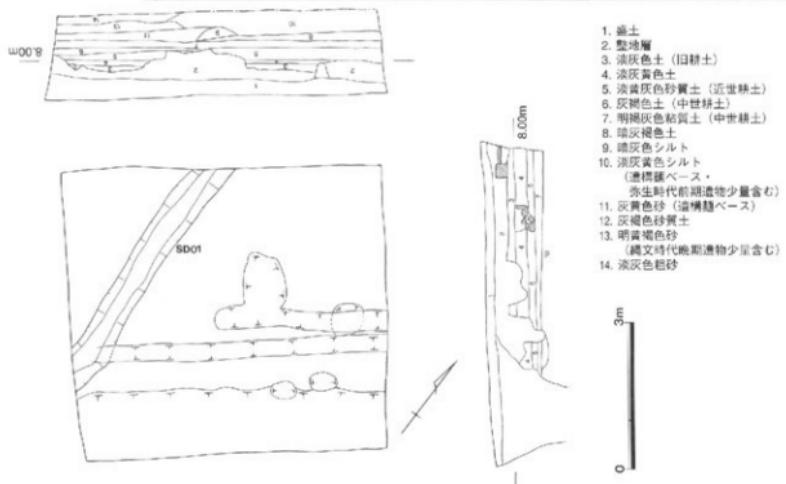


fig.239 調査区平面図・断面図

1. はじめに

大開遺跡は六甲山南麓に存在し、旧渋川に形成された沖積平野の微高地上に位置する。縄文時代晚期から遺構と遺物が確認され、弥生時代前期には環濠集落が営まれた遺跡である。また平安時代末～鎌倉時代の遺構も確認されている。



fig.240
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回は、大開小学校内で雨水貯水槽の造営に伴い、発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は搅乱盛土、旧表土、褐灰色砂質土（中世遺物包含層）、明褐色粘質土（上面が第1遺構面）、灰褐色粘質土、淡褐色シルト（上面が第2遺構面）、以下縄文時代晚期河道層と続く。

検出遺構

第1遺構面から鎌倉時代の鋤溝を検出した他、第2遺構面から弥生時代前期前半の多くの土器を含む落ち込みと土坑を検出している。それより下層（第3遺構面）は縄文時代晚期の土器を含む河道となる。

第1遺構面

鎌倉時代の須恵器や土師器を含む鋤溝を、15～20条検出している。

鋤溝は幅約30cm程度のものが最も多く、深さ約4cm～34cmを測る。すべて南北方向に延びており、座標北から西へ約40°振っている。

第2遺構面

弥生時代前期前半の遺構面である。落ち込みと土坑を検出している。

S X01

幅約3.0m以上×3.6m以上で、深さ約40cmを測る、不整円形の落ち込みである。弥生時代前期の土器が出土している。

S K01

幅約2.0m×2.0m以上で、深さ約25cmを測る、不整円形の落ち込み状の土坑である。弥生時代前期の土器が多数出土している。

S K02

幅は東西約100cm×南北約80cmで、深さ約26cmを測る、隅円方形の土坑である。壁面が焦土化しており、内部で何らかを焼成していたらしい。埋土を詳細に観察したが、弥生時代前期の細かな土器片が数点出土した他、砥石1点やサヌカイト片が多数出土しただけ

あり骨片は全く確認できず、炉跡ではないと考える。

第3造構面 工事の影響深度の関係で、底面までは掘削していない。

河道 河道の深さ約1.1mまで、掘削している。縄文時代晚期の土器が、小量出土している。

3. まとめ 今回の調査地は、第1次調査で確認された弥生時代前期の環濠の外側に位置する。造構は鎌倉時代の鋤溝の他、弥生時代前期の落ち込みと土坑が検出された。その下層は縄文時代晚期の河道となる。

第2造構面（弥生時代前期前半）で検出した落ち込み（SX01、SK01）は、不整円形でなだらかに落ち込み自然地形の窪みに土器を投棄した可能性も存在する。また土坑（SK02）は遺物があまり出土していないが、壁面が焼上化している。明らかに人為的な造構であるがその性格は不明である。

造構の細かな時期については、時期の判断できる土器資料が弥生時代前期前半の範疇に納まるかと判断でき、近接して調査された第1次調査で検出された弥生時代前期前半の造構面の続きである事から同時期だと判断できる。

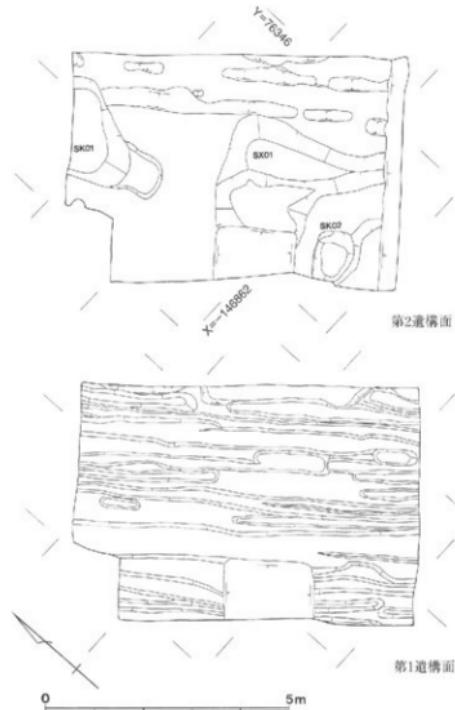


fig.241 調査区平面図・断面図

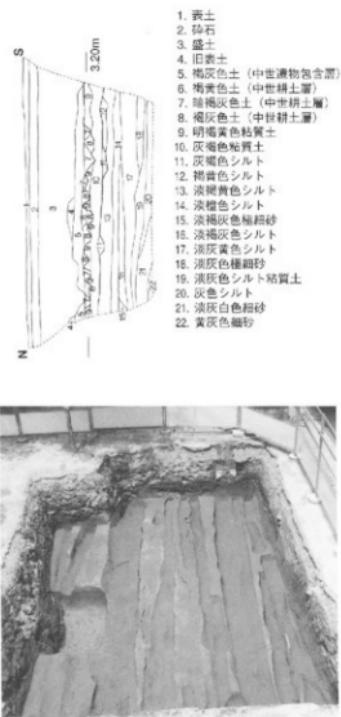


fig.242 第1造構面全景

7. 大開遺跡 第12次調査

1. はじめに

大開遺跡は、昭和63年度兵庫大開小学校の建設に伴い発見された。この第1次調査においては、弥生時代前期の環濠集落が確認されるなど大きな成果があった。その後の発掘調査は十数次におよび弥生時代前期の集落域の拡大に伴うと考えられる新たな環濠や、平安時代末～鎌倉時代の集落に伴う、生産城なども確認されている。



2. 調査の概要

今回の発掘調査は、共同住宅の建設に伴うもので、工事により埋蔵文化財に影響のある部分について実施した。

基本層序

基本層序は搅乱盛土、暗灰色砂質土、灰色砂質土、暗灰褐色砂質土（上面が近世遺構面）、淡黄褐色砂質土（上面が中世遺構面）、暗褐色粗砂混じり砂質土（弥生前期の遺物を含む）、淡茶灰褐色砂質土（弥生前期の遺物を含む）、淡灰褐色砂質土（弥生前期の遺物を含む）、淡灰色極細砂（黄褐色を帯びる）、淡黄灰色極細砂（固くしまる）と続く。



fig.244 調査区断面図

検出遺構 暗灰褐色砂質土の上面で近世の溝と鏟溝を確認した他、淡黄褐色砂質土の上面から中世の落ち込みを確認している。より下層については、少量の弥生時代前期の遺物を含む土層が続き、淡灰色極細砂（黄褐色を帯びる）で遺物を含まなくなる。この淡灰色極細砂（黄褐色を帯びる）上面まで調査区の一部を掘り下げる調査を実施したが、弥生時代前期の遺構は確認できなかった。

S D01 幅約1.2mで、深さ約40~60cmを測る。北西～南東方向に延びる、近世の溝である。近世遺構面で確認はしたが、調査は実施していない。16～17世紀頃の土器が出土している。

鏟溝 幅約20cm～36cmで、深さ約18cm～36cmを測る鏟溝である。座標北から約35°西へ振るか、それと直交する方向に延びている。近世遺構面から検出したが、調査は中世遺構面で実施した。時期の判断できる遺物は出土していない。S D01と同時期の遺構と考えると、16世紀～17世紀頃となる。

S X01 調査区の中央で検出した、不整形な落ち込みである。東西幅約7.1m、南北幅約11.1m以上で、深さ約60cmを測る。18世紀頃の須恵器や土師器が、多く出土している。

S X02 調査区の東端で検出した、不整形な落ち込みである。東西幅約0.6m以上、南北幅約4.4m以上で、深さ約50cmを測る。13世紀頃の須恵器や土師器が出土している。

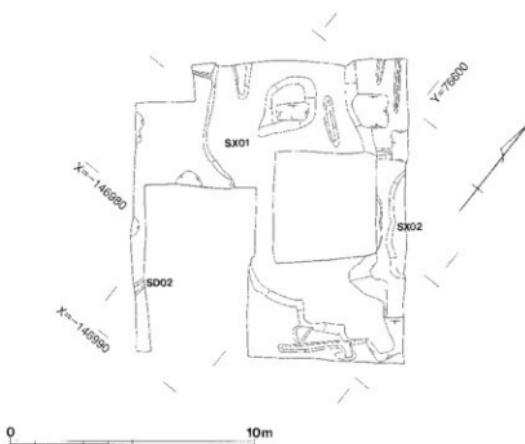
S D02 幅約40cmで深さ約15cmを測る、ほぼ南北方向に延びる溝である。遺物は出土していないが、中世遺構面で検出した溝である。

3. まとめ

今回の調査地は、近世には鏟溝が多く確認され、生産域である事実が確認できた。また中世では落ち込みが2基確認されている。不整形であるが、壁面は直に近く落ち込むもので人為的に掘削した遺構の可能性が高い。土層の堆積状況を観察すると、漏水しており、徐々に埋没していく様である。遺構の時期は13世紀頃であろう。

中世遺構面より下層では弥生時代前期の上器が出土しているが、遺構は確認できなかった。ただし、近辺に弥生時代前期の遺構が存在している可能性は存在する。なお、これらの弥生時代前期の土器は口縁部等の特徴的な部分が確認できず、詳細な時期の検討はできていない。

fig.245
調査区平面図



8. 兵庫津遺跡 第35次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市兵庫区南部のJR兵庫駅東側からJR和田岬駅付近にかけての広範囲に所在する兵庫の港と港町を中心とする古代（奈良時代）から近世期（江戸時代）の遺跡である。

今回発掘調査を行った地点は、元禄9（1696）年に描かれた『攝州八部郡福原庄兵庫津絵図（元禄兵庫津絵図）』によると「御屋敷」と記された尼崎藩の陣屋（後の勤番所）が所在した地点にあたる。兵庫陣屋については、尼崎藩が兵庫津支配のために奉行所を置いたもので、兵庫城の跡を利用したものとされる。

なお兵庫陣屋は、幕府の直轄地となった明和6（1769）年以降、新たな勤番所の建物の建築に伴い周囲の堀を埋め立てて南北分の敷地とともに町屋にされた。寛政2（1790）年の『兵庫津寺社方絵図』では、堀を埋め立てられた「勤番所」がみられる。明治維新後勤番所には県庁が置かれその後裁判所などに転用されたが、明治29（1896）年兵庫運河の掘削により取り壊された。



fig.246
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

本調査に先立って実施された、試掘調査および確認調査を引き継ぐかたちで工事により遺跡の破壊される部分について発掘調査を行なった。調査区は、南からI区、II区とG.r. 1～6を設定した。

基本層序

調査区の基本層序は、地表から120cmの表土・盛土の直下に第1遺構面が存在する。以下、焼土を伴う整地層を挟んで遺構面があるものと考えられるが、削平が激しく面としては捉えにくい整地層と遺構面の互層が層厚60cm程度あり現地表から180cmほどで砂層に達する。

I区

第1遺構面において、石垣を伴う濠および町屋跡が検出された。

濠

濠は、調査区の南を東西方向に横断するもので、延長約8m、高さ（深さ）約1.2mの石垣の列が確認されている。

石垣は、切石を4～5段布積みにしたもので、最下段の石列の西側半分については、前方にせり出しており、積みなおしが行われた可能性がある。

この石垣の前面（南側）には、濠状の堆積が認められ江戸時代中期（18世紀後半）から後期（19世紀）にかけての遺物が出土した。濠の対岸は未確認で調査区外に存在すると考えられる。

II区 II区においては、搅乱が激しく検出した遺構面はI区の第3もしくは第4遺構面に相当するものと考えられる。

土師皿集積 北壁際において土坑を1基検出した。遺構の大半は調査区外となるようである。土師器の小皿が10枚ほど出土した。

下層遺構面 基礎予定部分G r. 1～6について下層遺構面を調査した。現況道路面より約2m掘り下げる砂層となり激しい湧水がみられる。この前後の砂層から15～16世紀頃と考えられる遺物が多く出土する。

3. まとめ 今回の調査は、比較的狭い面積の調査であったが、兵庫陣屋に伴うと考えられる石垣や濠が確認されるなど非常に多くの成果を得ることができた。

なお、本調査の詳細な成果については、平成18年3月刊行の『兵庫沖遺跡－第35次発掘調査概要－』を参照いただきたい。

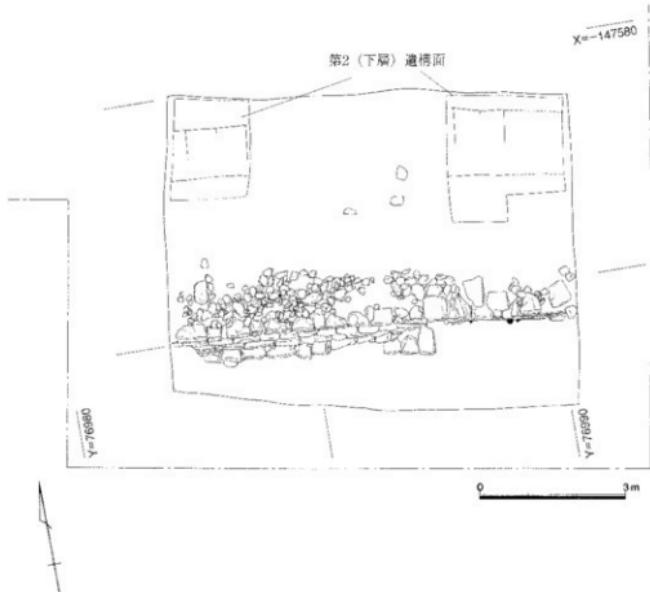


fig.247 調査区平面図（南部）

9. 兵庫津遺跡 第36次調査

1. はじめに

今回の調査は、神戸市兵庫区北逆瀬川町1丁目での共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は兵庫津遺跡のほぼ中央に位置し、昭和38年までは時宗長楽寺の地所であり、寺の移転後は飲料会社の事務所・倉庫となっていた。



2. 調査の概要

今回、当該地でマンション建築が計画され、敷地の内で建物の建設により埋蔵文化財に影響を及ぼす約800m²を調査対象として実施した。

基本層序

調査区内の土層堆積は、中央部で上層から茶灰色砂、灰色砂、褐色・灰茶色砂、白色砂の順に堆積し、これが基本的な層序となる。白色砂の上に茶色系の砂が、それぞれ20~30cmの厚さで堆積する。周辺ではそれぞれ堆積層に違いがあり、これは西側が溝、東側が古い段階から下がり地形となっており、この旧地形を整地したこと、また北側と南側では建物の造営と墓地の形成により異なる整地が行われたことに起因するものと考えられる。

検出遺構

調査区内は從前建物による搅乱がひどく、特に南側5分の1と北東部5分の1の範囲は既にほとんどの部分で遺構面が失われていた。搅乱により、調査地の全体像の把握は非常に困難であったが、中世末、江戸時代後期、幕末～昭和時代初期までの3時期（第1～4遺構面）の遺構面が確認できた。

第1遺構面

第1遺構面では調査区の北半において寺院建物（堂舎）礎石とこれを囲む石列（石垣）をもつ基壇および土坑と墓地が検出された。

第2遺構面

第2遺構面でも南半において引き続き墓地の検出が、北側では建物の造営に伴う地業痕跡が確認された。第1および第2遺構面において確認された埋葬施設の数は100基を超える。

第3遺構面

第3遺構面では調査区の北半で大量の遺物が出土する大形の落ち込み（S X01）と土坑3基、銀冶炉、井戸などを、また南半で溝状の落ち込みや土坑1基を検出した。

第4遺構面

続く第4遺構面では15世紀代を中心とする柱穴などを検出した。またS X01の東で護岸に伴う依頼み遺構と調査区南端の搅乱内の試掘坑で平安時代の井戸を検出した。

3. まとめ 今回の調査は、従前の建物による搅乱の影響も大きく層位的に全体像を把握することが困難であったが兵庫津遺跡の中で近世寺院という調査例の少ない造構が確認できた。さらに多量の遺物の復元から、生活に供する様々な種類の道具の使用が判明したことが最も大きな成果であった。

なお、本調査の詳細な成果については、平成18年3月刊行の『兵庫津遺跡第36次発掘調査概要報告書』を参照されたい。



fig.249 第1造構面平面図



fig.250 第3造構面平面図



fig.251 第1造構面全景



fig.252 第3造構面全景

10. 上沢遺跡 第52次調査

1.はじめに

上沢遺跡は、会下山による小丘陵の裾部に形成された扇状地に位地している。縄文時代晚期から遺物が出土しており、弥生時代前期～鎌倉時代には集落等も確認されている遺跡である。遺跡の北西に接して、古代寺院跡と推定されている室内遺跡も存在し、奈良時代には官衙や工房的な施設の存在した事も想定されている。



fig.253

調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

今回は分譲住宅の建設に伴い、遺跡の破壊される部分についてのみ発掘調査を実施した。基本層序は、搅乱、淡黄灰褐色砂質土、淡灰色砂質土、灰色砂質土、(中世前期の遺物を含む、下面が第1遺構面となる)暗灰色膠混じり砂質土(古墳時代後期～平安時代頃の遺物を含む、下面が第2遺構面となる)、暗灰色砂質土(庄内式終末期～布留式期の遺物を含む、下面が第3遺構面となる)、淡黒灰色砂質土(弥生時代後期～庄内式期の遺物を含む、下面が第4遺構面となる)、淡黄褐色砂質土となる。

第1遺構面

遺物包含層の時期から、中世前期と判る遺構面である。土坑2基を検出している。

S K101

東西幅約100cm×南北幅約90cmで深さ約10cmを測る、不整円形の土坑である。時期不明の須恵器が出土している。

S K102

遺構の東半分は搅乱により削平された土坑である。南北幅約42cm×東西残存幅約26cmで、深さ約16cmを測る。遺物は出土していない。

第2遺構面

遺物包含層の時期から、古墳時代後期～平安時代頃の可能性が高い遺構面である。土坑2基と落ち込み1基を検出している。

S K201

東西幅約128cm×南北幅約78cmで、深さ約25cmを測る隅丸方形の土坑である。古墳時代後期の須恵器片が出土している。

S K202

東半分は調査区外に続いている。東西幅約70cm以上×南北幅約90cmで深さ約36cmを測る、隅丸方形と考えられる土坑である。時期を特定できる遺物は出土していない。

S X201

調査区の北西角で検出した。東西幅約3.7m以上×南北幅約1.8m以上で、深さ約17cmを測る落ち込みである。自然に形成された落ち込みの可能性が高い。

時期を特定できる遺物は出土していない。弥生時代後期～古墳時代前期頃の土器片だけが出土しており、第3造構面を覆う遺物包含層の堆積層を掘削している可能性も存在する。

第3造構面 古墳時代前期初頭（庄内式終末期）～古墳時代前期（布留式期）頃の造構面である。土坑3基とピット3基を検出している。

S K301 東西幅約40cm×南北幅約50cmで深さ約6cmを測る、不整円形の土坑である。小縫～中縫を多量に出土しているが、遺物は出土していない。

S K302 東西幅約86cm×南北幅約92cmで深さ約9cmを測る、不整円形の土坑である。庄内式終末期～布留式期頃と考えられる甕が出土している。

S K303 東西幅約38cm×南北幅約26cmで深さ約10cmを測る、不整円形の土坑である。庄内式終末期～布留式期頃と考えられる甕が出土している。

S P301 径約12cm×30cmで深さ約10cmを測るピットである。遺物は出土していない。

S P302 径約22cmで深さ約5cmを測るピットである。時期を特定できる遺物は出土していない。

S P303 径約28cm×20cmで深さ約9cmを測るピットである。

第4造構面 遺物包含層の時期から、弥生時代後期～古墳時代前期初頭（庄内式期）頃となる可能性が高い造構面である。工事の影響深度の関係から、調査区の南側端部と東側端部をL字形に、トレンチ状に掘削して調査した。

調査範囲が狭く、造構は確認されていない。北から南にむけて、造構面は徐々に落ち込んでいる。

3. まとめ 今回の調査では第1造構面（中世前期）、第2造構面（古墳時代後期～平安時代頃）、第3造構面（庄内式終末期～布留式期頃）、第4造構面（弥生時代後期～庄内式期頃）で造構と遺物が確認できた。

遺物は中世前期の須恵器や土師器を除き、各造構面の時期を確定した土器の他は、ほとんどが弥生時代後期～庄内式期頃の土器である。調査地の南側に近接した第33次調査では銅鏡等の出土した奈良時代の井戸も確認されているが、今回の調査では奈良時代～平安時代の遺物も僅かに出土しただけであり、当時期の造構も確認できていない。第3造構面では造構内から庄内式終末期～布留式期の形が復元できる甕が出土している。

遺物の出土量を考慮すると、今回の調査地で主体となる時期は、大部分が未調査で地下保存となっている弥生時代後期～庄内式期の第4造構面である可能性が考えられる。

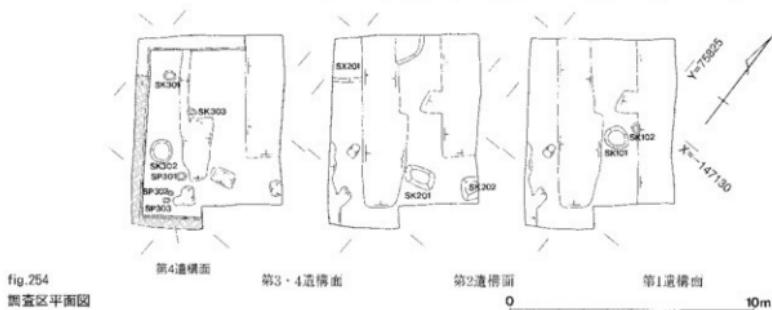


fig.254
調査区平面図

11. 中遺跡

1. はじめに

中遺跡は、北区八多町中に所在する弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。遺跡は、武庫川の支流である八多川と有野川の合流点付近の、八多川左岸の段丘上及び沖積微高地に立地している。



2. 調査の概要

調査対象地は4ヶ所に分かれており、調査区はいずれもL字状のトレンチ状を呈する。着手順に1～4区と呼称して調査を実施した。各調査区とも既に区画整理事業に伴う1次造成が実施されており、大規模な盛土造成が行われている。このため、外見上は旧地形を窺い知ることはできず、工事影響深度と埋蔵文化財の関係については不明な点が多くかった。そこでまず各調査区の状況を知るために部分的に掘削を行い、埋蔵文化財が確認された部分を拡張して調査を実施することにした。

1区

堂ノ元地区で実施した調査である。調査区は、幅1.5mで、長さは南辺で約19m、東辺で約65mを測る。北部において6ヶ所（1区-A～1区-F）、南部において2ヶ所（1区-G・1区-H）の小調査区（幅1.5m、長さ2m）を設定して調査区の状況の把握に

努めた。大半の小調査区において、盛土・旧耕土の下層で旧地表面と考えられる土層を確認したが、いずれの小調査区からも遺構・遺物は検出されなかった。このため調査区全体の掘削は行わず、調査を終了した。

2区 池尻地区で実施した調査である。調査区は、幅2.0mないし2.5mで、長さは南辺で約18m、東辺で約20mを測る。4ヶ所の小調査区（2区-A～2区-D）を設定して調査区の状況の把握に努めたが、2区-A、B、Dにおいて旧耕土から少量の遺物が出土したのみで、遺構は確認されなかった。このため調査区全体の掘削は行わず、調査を終了した。

3区 池尻地区において2区の西側隣接地で実施した調査である。調査区は、幅1.5～2.0mで、長さは西辺で約3m、南辺は約28m、東辺は約15m、北辺は約10mを測る。小調査区を設定して調査を実施したところ、南部では灰色系のシルトから遺物は出土するものの遺構は確認されず、全面調査には至らなかった。北東部に設定した3区-Dにおいて、淡黄灰色



fig.256 3区平面図



fig.257 3区全景



fig.258 S P 05平面図・断面図

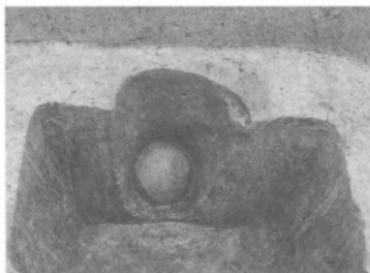


fig.259 S P 05

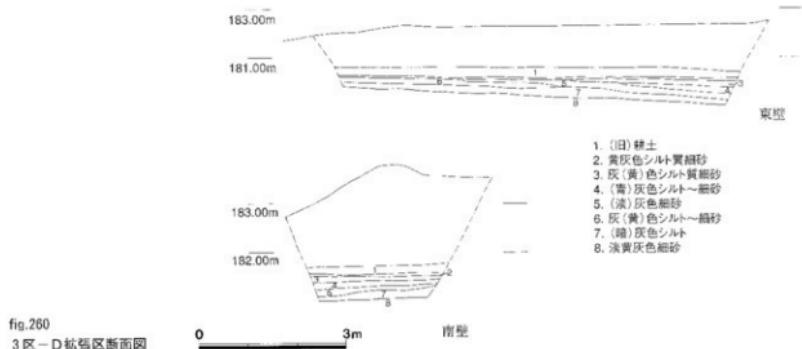


fig.260
3区-D拡張区断面図

細砂上面でピットが検出されたので拡張（3区-D拡張区と呼称）して調査を実施した。

調査の結果径20~30cmのピットが計6基検出された。遺構検出面の標高は、181.0~181.4mである。また北端部の西側隣接地を3区-G調査区として調査を実施し、ピット1基を検出した。

ピットのうちS P05では、柱抜き取り後に投棄された完形に近い須恵器の塊が出土した。またS P06は根固めに用いられたと考えられる奉人の礫が数個検出された。以上からこの両調査区で検出した計7基のピットについては、掘立柱建物の柱穴である可能性が高いと考えられる。調査区の制約により建物のまとまりを把握することは困難である。3区の北側隣接地で兵庫県教育委員会が実施した調査では柱穴と考えられる遺構は確認されていないため、3区-D拡張区西側の地区に掘立柱建物が展開するものと考えられる。なお、3区-G調査区の西側で設定した3区-E調査区では遺構面基盤層の淡黄灰色細砂は確認されたが、遺構は検出されなかった。

3区-D拡張区・3区-G調査区で検出した遺構の時期はS P05出土須恵器から12世紀前半頃と考えられるが、詳細は整理作業の進展を待って検討したい。

4区 道ノ上地区で実施した調査である。調査区は、幅1.5m（南部）及び2.5m（北部）で、長さは東辺で約16m、南辺で約10mを測る。南半部西端はガス管が存在するため掘削不能であった。また、北端部はその北側に新設の排水管が設置されておりその南側に大規模な盛土が存在するため掘削不能であった。他の調査区と同様に小調査区を設定して調査区の埋蔵文化財の状況を確認したところ、調査区北部でピット1基を検出したので上記の掘削不能部分を除いた部分について全面発掘調査を実施した。掘削・調査できた範囲は約40m²である。調査の結果、IHII面造成時の削平や擾乱のため平坦面がわずかしか検出

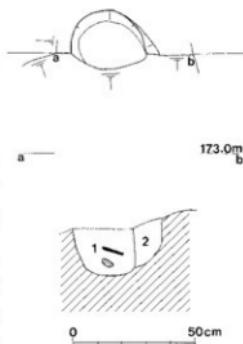


fig.261 S P01平面図・断面図

されず、確認した遺構も前述のピット1基のみである。遺構検出面の標高は172.2～172.9mである。

ピット(S P01)は北半分が搅乱のため失われている。残存部は、径30cm、深さ23cmを測る。須恵器片が1点出土している。小片のため詳細な時期については不明であるが、おそらく中世のものと考えられる。なお、4区の西側隣接地において兵庫県教育委員会によって発掘調査が実施されており中世の掘立柱建物などの遺構が検出されている。今回検出したS P01も掘立柱建物の柱穴である可能性が高いが、位置関係から兵庫県教育委員会が確認した掘立柱建物とは別の建物と考えられる。

3. まとめ 今回の調査では堂ノ元地区(1区)では遺構・遺物は確認されなかったが、池尻地区(3区)・道ノ上地区(4区)で遺構・遺物が検出された。

先述したように今回の調査地の隣接地において既に兵庫県教育委員会により発掘調査が実施されており、中世などの遺構が確認されている。今回は調査区の制約により建物としてのまとまりを確認することはできなかったが、掘立柱建物の柱穴の可能性が高いピットを確認しており、周辺地区と同様に中世の集落域が広がっていたことが確認できた。

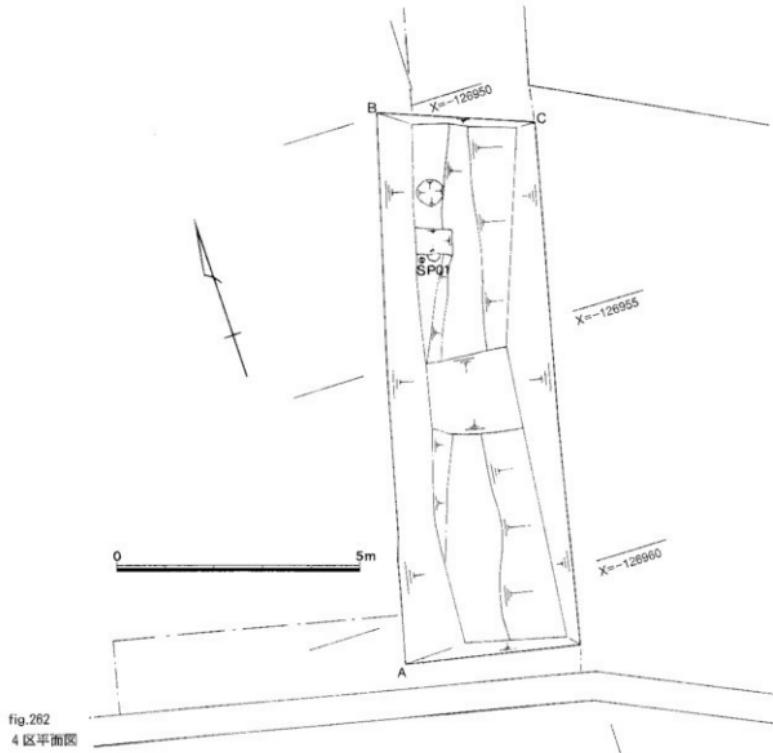


fig.262
4区平面図

12. 野瀬遺跡 第5次調査

1. はじめに

野瀬遺跡は旧播磨国美義郡、加古川の支流である屏風川および鳴川沿いにある遺跡で、これまでの調査によって平安末・鎌倉時代以降の農村集落の存在が確認されている。

今回の調査は圃場整備事業に伴い4地点、計約2000m²についてこれを行った。



fig.263
調査地位置図
1:5,000

2. 調査の概要

1区・2区では中世の遺物包含層と柱穴様の遺構・土坑・溝などが確認された。1区からは縄文時代のものと推定されるサヌカイト製石匙また同剥片が出土している。3区では中世の遺物包含層、自然流路・水田・牛蹄跡などが確認された。4区は遺物の出土が最も多い地点で、柱穴・杭列・自然流路・溝・牛蹄跡などが検出された。

3. まとめ

4地区とも建物跡等、目立った遺構は検出されなかった。しかし遺物包含層から中世の土器がある程度の量出土しており、周辺に当時の居住域が存在する可能性が高い。

縄文時代の遺構も検出できなかったが、2区で出土したサヌカイトは石器自体だけでなく、石器製作に際して出るサヌカイト屑を伴っている。このことは2区周辺において石器製作が行われたことを示し、石匙についてもたまたまこの地に落とされたものではなく、その製作者の住む縄文のムラがこの近隣に所在する可能性を推測できるだろう。

3区では棚田の区画段、土留めの杭が確認されており、耕土である3a層下面には多数の牛蹄跡が検出され、中世において耕作地として利用されていることが確認できた。

4区は遺物の出土量が他に比べて多く、より近いところに当時の居住域が存在するものと考えられる。またここで検出されたS D01・02は溝内から土器類が出土しているが、人の手になる遺構とは考えにくい。蛇行し相似形を呈するこの溝はS D05も含め地滑りによる地割れの痕跡であると考えたい。

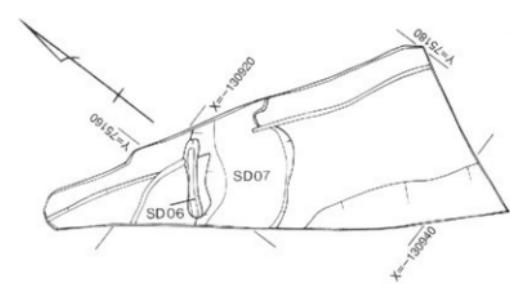
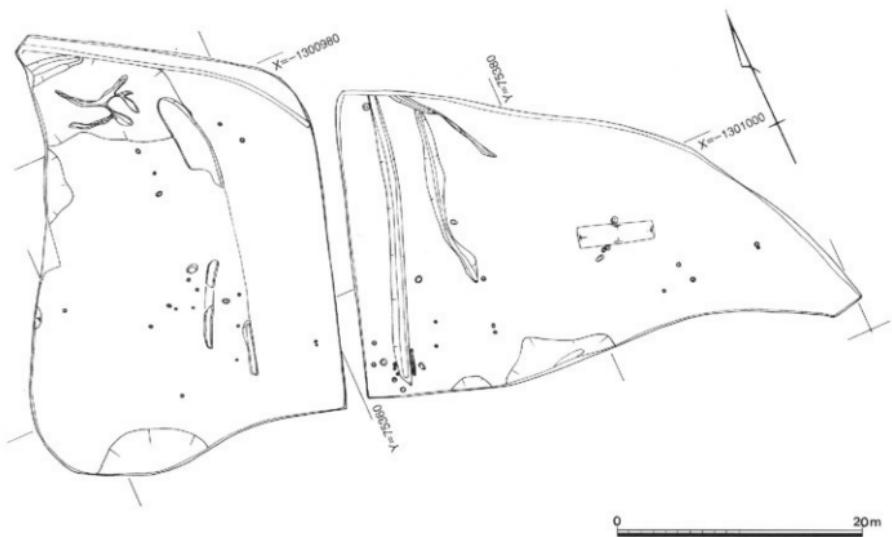


fig.264 1·2区全景

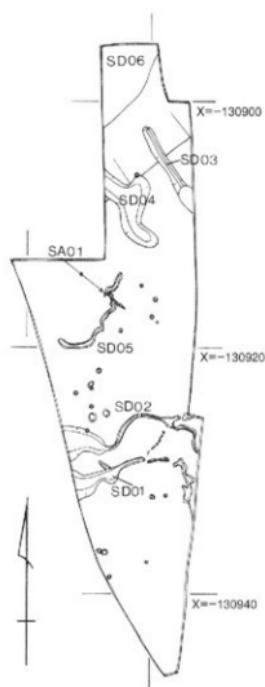
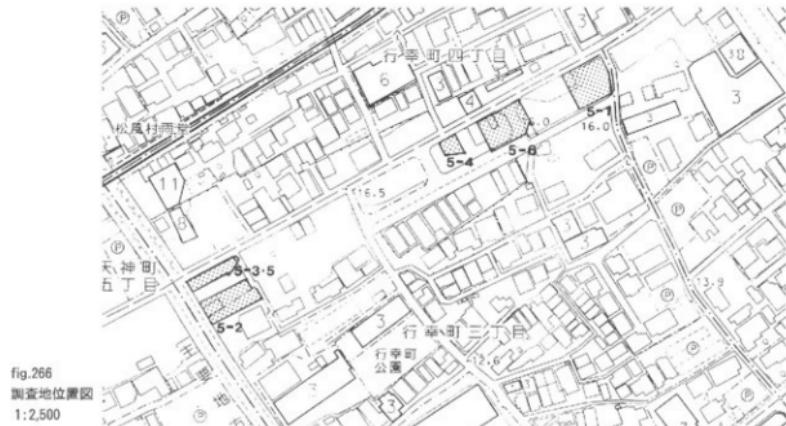


fig.265 调查区平面图

1. はじめに

行幸町遺跡は、神戸市須磨区行幸町3丁目に所在する。地形的に見れば、神戸の市街地の背山である六甲山と大阪湾に挟まれた狭い平野部の西端近くに位置しており、千守川によって形成された扇状地上に立地している。現標高は16~17mである。調査地の北側に近世の西国街道が通り、また古代の山陽道もほぼ同じルートを通っていたと推定されており、当地域は古代より交通の要衝として知られている。

須磨中央幹線築造に伴う試掘調査で発見された当遺跡は、これまでの調査で、飛鳥時代から奈良時代、及び中世の遺構・遺物が発見されており、特に昨年度の調査では鎌倉時代頃の墓から比較的遺存状態が良好な人骨が検出されている。



2. 調査の概要

今回の調査も須磨中央幹線築造に伴うもので、調査は着手可能な地区から順次実施した。調査着手順に第5-1~6次調査と呼称する。

第5-1次調査

当遺跡の中では東端に近い地区で実施した調査である。現代の攪乱を多く受けており、遺構面の遺存度は悪い。遺構面の標高は、15.5~16.1mを測る。

掘立柱建物2棟、土坑1基、溝状落ち込み3条、ピット約70基を検出した。

S B01 調査区西端部で検出した掘立柱建物で、西側の柱穴列については昨年度実施した第4-3次調査で既に確認していた。今回の調査で残りの柱穴を確認し、梁行3間×桁行6間の建物であることが判明した。南北棟の建物で、主軸方向は現在の街区の区画にはほぼ沿うものである。平安時代の建物と考えられるが、詳細については、柱穴出土土器の整理作業の進展を待って検討したい。

S B02 調査区中央南半で検出した梁行2間×桁行4間の掘立柱建物である。柱穴は梢円形あるいは隅丸方形の大型の掘形をもつ。

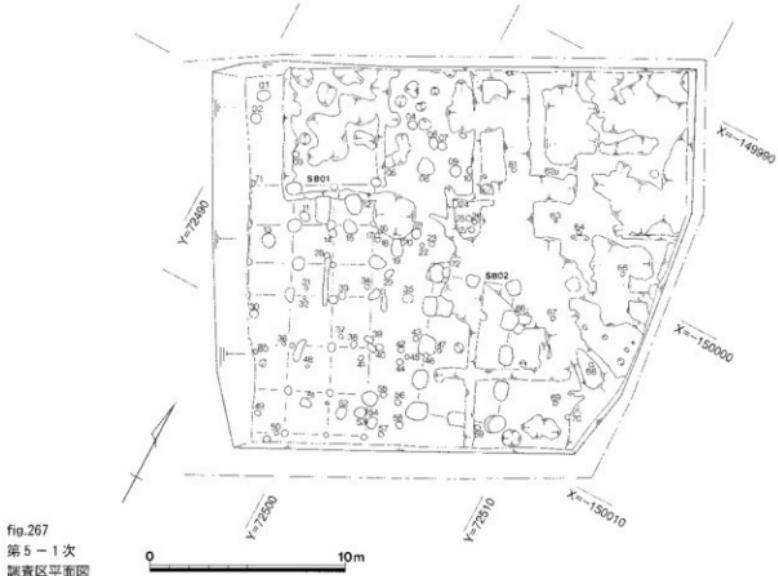


fig.267
第5-1次
調査区平面図



fig.268
第5-2次
調査区平面図

奈良時代頃の建物と考えられるが、詳細は整理作業の進展を待って検討したい。

- S X01** 調査区西部で検出した十坑で、長径1.45m、短径0.74m、深さ20cmを測る。墓の可能性も考えられるが、木棺の痕跡などは確認されていない。
- ピット** ピットは約70基確認している。現段階では明確ではないが、上記の建物以外にも建物が存在していた可能性は高い。

第5-2次調査

当遺跡の中では、西端に当たる地区で実施した調査である。現地表下35~75cm（標高15.2~15.5m）で、造構面を確認した。検出した造構は、井戸3基、土坑1基、ピット44



fig.269
第5-1次
調査区全景



fig.270
第5-2次
調査区全景

基を検出した。

S X01 調査区西端部で検出した平面円形の土坑で、径 1.3×1.26 m、深さ20cmを測る。S E02を切る。須恵器・土師器・陶器・磁器・瓦器・瓦が出土している。室町時代後半以降の構構と考えられるが、詳細は整理作業の進展とともに検討したい。

S E01 調査区西端部で検出した素掘りの井戸で、掘形の平面形は隅丸方形に近い。掘形の規模は、径1.7m、深さ1.7mを測る。内部で径50cmを測る曲物を検出している。須恵器・土師

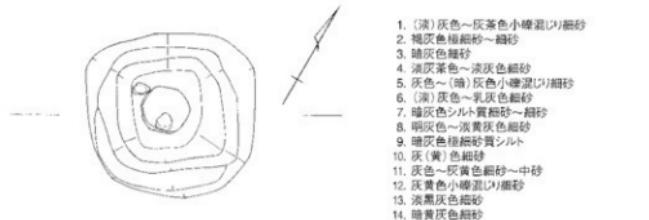


fig.271
第5-2次調査
S E01平面図・断面図

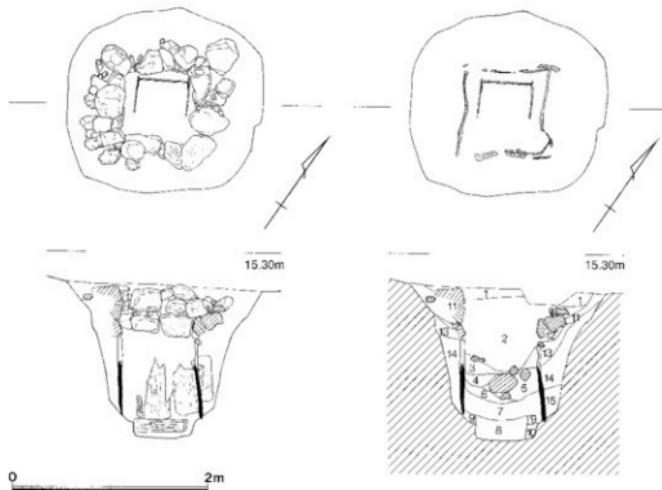


fig.272
第5-2次調査
S E02平面図・断面図



fig.273 第5-2次調査 S E02



fig.274 第5-2次調査 S E03

器・瓦器・陶器・磁器・土鍤が出土しており、鎌倉時代の遺構と考えられる。

S E02 調査区西端部で検出した井戸で、下部は木製の井戸枠、最下部に板材を方形に組んだ集水施設、上部は平面方形に花崗岩の石を3段積んでいる。掘形の規模は、 $2.01 \times 1.87\text{m}$ 、深さ 1.65m を測り、平面形はやや歪な円形を呈する。須恵器・土師器・瓦器・陶器・磁器・土鍤が出土しており、室町時代の遺構と考えられる。

S E03 調査区東端で検出した井戸で、掘形の平面形は径約 $3.2 \times 3.0\text{m}$ の円形である。深さは 2.38m を測る。

下部は木製の井戸枠、最下部に丸太を削り貫いた円筒状の集水施設、上部は平面円形に花崗岩の石を積んでいる。須恵器・土師器・瓦器・陶器・磁器・土鍤が出土しており、鎌倉時代の遺構と考えられる。

S D01・02 調査区南西部で検出した、東西方向に並走する2条の溝で、切り合い関係が認められ、S D02がS D01を切っている。S D01は幅 30cm 、S D02は幅 $18 \sim 50\text{cm}$ で、深さはともに 5cm 程度を測る。

ピット 計44基を検出した。調査区内で掘立柱建物としての縋まりを認めることはできなかったが、東側で昨年実施した第4-2次調査でも同様な時期のピットが検出されているので、それらのピットとともに建物群を構成するものと考えられる。

第5-3次調査

第5-2次調査地区の北側で実施した調査である。溝および溝状の落ち込み各1条、土坑1基、井戸状の遺構1基、土師器羽釜埋設遺構1基、ピット16基などを検出した。

S X02 調査区中央北端で検出した水溜めあるいは井戸と考えられる遺構で、径 $1.36 \times 0.7\text{m}$ 以上、深さ 1.1m を測る。

S X04 当調査区北西隅から西隣の第5-5次調査区北東隅で検出した土坑状の遺構で、拳大程度の礫が大量に投棄されていた。S D01を切っている。第5-5次調査分と合わせて、須恵器・土師器・陶器・磁器などが出土している。中世の遺構と考えられるが、性格については不明である。

S D01 調査区中央南端から北西隅に流れ、西隣の第5-5次調査区へ続いている。周辺地で実

施した既往の調査で確認されている大溝と同一の遺構と考えられる。中世段階に最終的に淡灰色～淡灰茶色の極細砂～小礫によって埋まっている。この層を除去した段階で、底部を打ち欠いた土師器羽釜を埋設した S X05 を検出した。おそらく取水のために設置された施設であろう。

ビット ビットは主に調査区東部で検出した。中世のものと考えられる。同様な時期のビットは昨年度実施の第4～2次調査や第5～2次調査でも検出しており、今後さらに掘立柱建物としてのまとまりについて検討を加えたい。

第5～4次調査

当遺跡の中では、中央寄りに当たる地区で、実施した調査である。

明確な遺構は、調査区西端部で検出した溝1条のみで、そのほかに土坑状の落ち込みや斬溝なども検出している。搅乱や田圃造成による削平の影響を大きく受けていることの影響も考えられるが、元来遺構の密度が低かった可能性もある。

第5～5次調査

第5～3次調査地の西隣で実施した調査である。

第5～3次調査から続くかたちで、S X04・SD01を検出したほか、ビットを15基検出した。ビットからは出土遺物がなく詳細は不明であるが、おそらく周辺地区で確認されているものと同様に中世のものであろう。

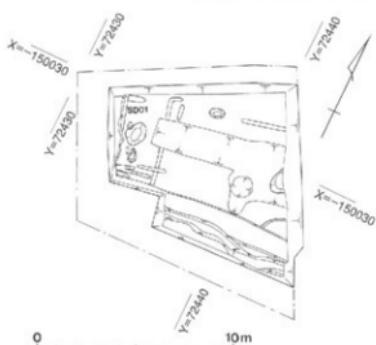
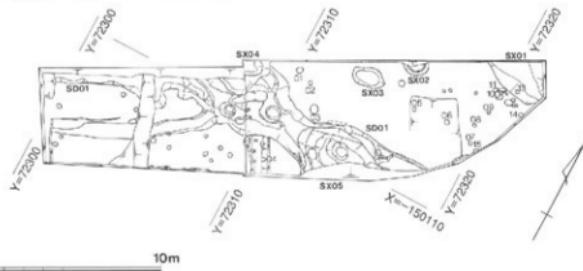




fig.278

第5-3次
調査区全景



fig.279

第5-5次
調査区全景

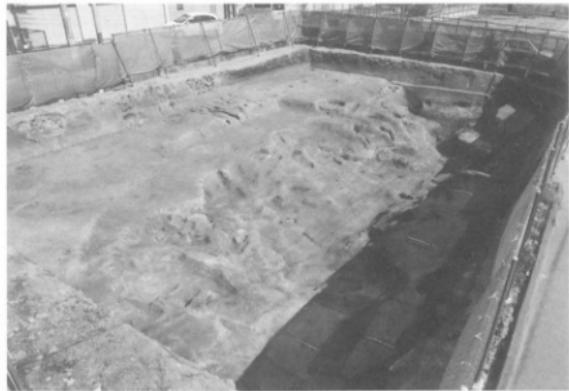


fig.280

第5-6次
調査区全景

第5－6次調査

昨年度実施した第4－3次調査地の西隣で実施した調査である。

調査区北半部ではピット約20基、落ち込み3基、土坑2基などを検出し、調査区南半では溝3条、落ち込み1基を確認した。

S D01 第4－3次調査からつづく大溝である。西半部は南西から北東方向に流れ、調査区中央で段落ちしてテラス状の中段につづき、その東側で東半分の流路に合流する。段落ち部分では杭及びその痕跡を2ヶ所確認している。一方、第4－3次調査からつづく東半分は流れる方向をやや急激に変えて南東方向に流れる。

ピット ピットの中には掘立柱建物の柱穴の可能性があるものも含まれているが、調査区内ではそのまとまりを認めることはできない。

3. まとめ 今回の調査は行幸町遺跡の東・西の大きく2ヶ所において実施し、東側で実施した第5－1・6次調査では奈良時代・平安時代を中心とする造構・遺物を、西側で実施した第5－2・3・5次調査では鎌倉時代・室町時代を中心とする造構・遺物を、それぞれ確認した。特に、従来から存在が認識されていた大溝は今回の調査でも確認され、行幸町の東端から西端まで東西に横断し、離宮道以西はやや北向きに流れる方向を変えていることが明らかとなった。

今回の調査結果は、これまでに実施してきた周辺地での既往の調査成果と符合し、補強するものであり、行幸町遺跡全体あるいは西側に所在する天神町遺跡との関連について考えるうえでも貴重な資料を得ることができたものといえる。

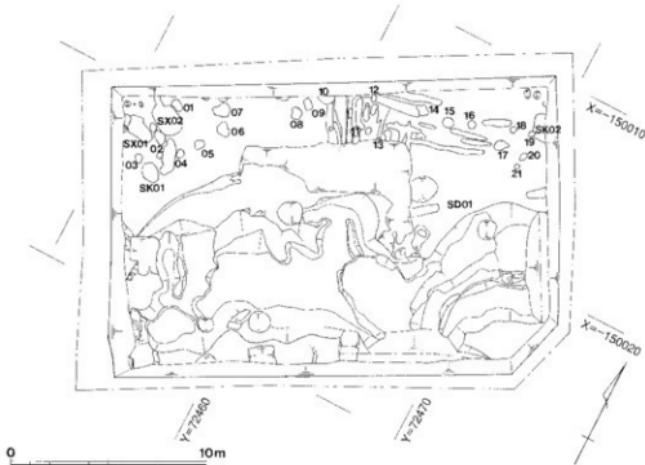


fig.281 第5-6次調査区平面図

14. 飛松町遺跡 第1次調査

1. はじめに

飛松町遺跡は市営地下鉄板宿駅の北方に拡がる遺跡で、妙法寺川が形成した扇状地扇央部に立地している。

平成15年度に試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため遺跡であることが判明した。從来、板宿駅の南側や西側では弥生時代前期～古墳時代初頭・平安時代末～鎌倉時代の遺構や遺物が確認されている戎町遺跡が存在したが、確認された遺物は平安時代後半のものであったため、戎町遺跡とは異なる新たな遺跡として、町名より飛松町遺跡と名付けられた。



また遺物が出土しなかったため時期が不明である遺構もあるが、検出した遺構の時期は鎌倉時代頃・平安時代後期・弥生時代中期～後期の3種類があり、後世の削平によって各時期の遺構が同一面化した遺構面と考えられる。ただし、鎌倉時代のピットは溝SD102や落ち込みSX105同様に、1層上が本来の遺構面である可能性が高い。

S A101 調査区の中央で検出した掘立柱塹である。北東から南西方向に5間分を確認したが、南北西方向へは調査区外へさらに伸びる可能性がある。全長16.6m以上、柱間は2.9～3.6mである。削平されているためかそれぞれの柱穴の規模は直径20～30cm、深さ約5～20cmと小規模である。遺物は出土しなかった。

S D101 調査区の西辺南半で検出した南北方向の溝である。後述する旧河道SR101が埋った後に掘り込まれている。溝の南端が調査区外に続くため全長は不明であるが、長さ9.2m以上、幅は広狭があって0.4～1.2m以上、深さ約10cmである。断面は浅い皿状で、黄橙色粘土混じり暗茶灰色粘質土である。

遺物のほとんどは黒色土器で、その他には須恵器・土師器が微量出土した。

S D102 調査区の中央を西北西から東南東に貫く状況で検出した溝である。他の遺構とほとんど同一面で検出されたが、調査区南東隅では1層上から掘り込まれていた。両端が調査区外に続くため全長は不明であるが、長さ25.0m以上、幅0.6～1.7m、深さ約60cmである。断面は概ね逆台形であるが、場所によっては最深部が若干左右に振っている。埋土は、概ね上部は黄色～褐色系の水流に伴うラミネーションがある砂質土、下部は澁水による灰色系の粘土である。遺物は土師器・須恵器・黒色土器が微量出土したが、黒色土器は溝SD101が削り取られて混入したもの可能性が高い。

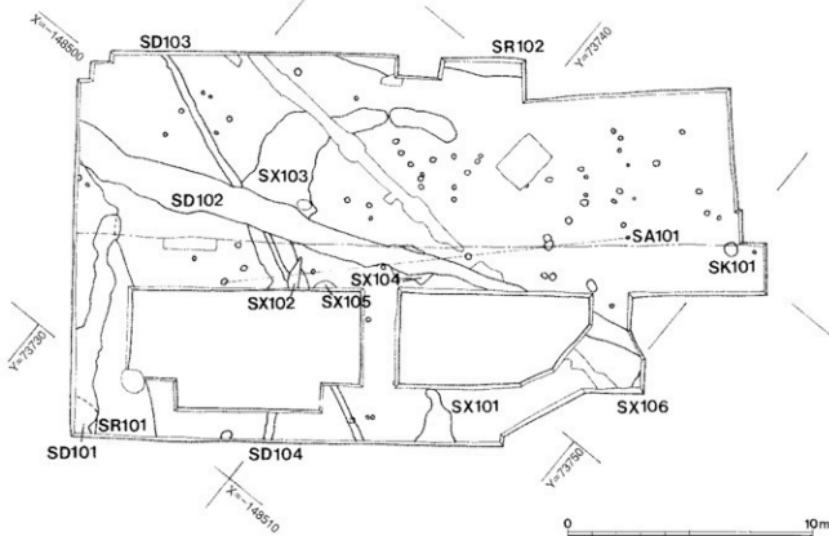


fig.283 調査区平面図

旧耕作土上から掘り込まれていたことが明らかのこと、上部埋土にラミネーションがあること、下部は漏水による粘土であること、完全には一致していないが、溝の方向は周辺の地割方向と概ね一致していることから、溝の性格は耕作に伴うものと推定できる。

- S D103 調査区の西寄を北北西から南南東に貫く状況で検出した溝である。両端が調査区外に統くため全長は不明であるが、長さ17.7m以上、幅は0.2~0.4m、深さ約10cmである。断面は皿状で、埋土は灰褐色あるいは褐灰色砂質土である。

遺物は土師器・弥生土器が微量出土した。切合関係から後述する落ち込み S X103 より新しいことが判るため、遺物の出土量は少ないが平安時代頃と考えられる。

- S D104 調査区の南西寄で検出した溝である。両端が調査区外に統くため全長は不明であるが、長さ1.2m以上、幅は0.4~0.6、深さ約10cmである。断面は皿状で、埋土は黄褐色シルト混じり灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

- S K101 調査区の東辺中央で検出した円形の土坑である。直径0.6m、深さ約10cmで、底面は平らである。埋土は暗灰褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

- S X101 調査区の南辺東寄で検出した不整形の落ち込みである。南側は調査区外に統くため全体の規模は不明であるが、長さ2.2m以上、幅1.6m以上である。周囲からは浅く傾斜するが底部には起伏があり、深さは約20cmである。

埋土は、灰茶色砂混じりシルトと黄褐色粘土が混和したもので、遺物は土師器・須恵器が微量出土した。須恵器が出土したことからこれも平安時代頃と考えられる。

- S X102 調査区の中央西寄で検出した逆「D」字形をした落ち込みである。南端の一部分が調査



fig.284 S A101



fig.285 S D102

区外に続くため全体の規模は不明であるが、推定長約2m、幅約0.5m、深さは約10cmである。埋土は淡灰黄色シルトで、遺物は土器器が微量出土した。

切合関係から溝S D103より新しいことが判るため、同一面で検出したが、これも本来は1層上から掘り込まれた遺構の可能性がある。

S X103 調査区の中央で検出した弧状の落ち込みである。南端の一部分が調査区外に続くため全体の規模は不明であるが、推定規模は直径約10mと大きい。円形周溝墓の周溝のようにも



fig.286
調査区南半部全景

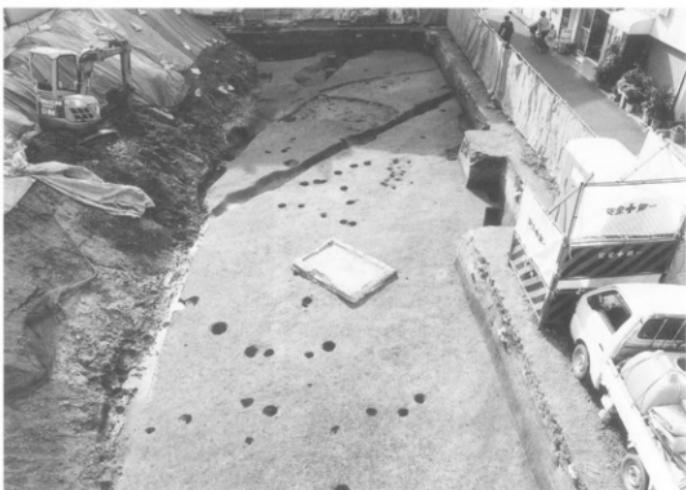


fig.287
調査区北半部全景

見えるが、溝の底面に起伏が著しいこと、削平されて消滅した可能性もあるが埋葬主体部に相当するものが検出されなかったこと、供獻土器が出士しなかったことから周溝墓であるとは判断できない。今後周辺での調査事例の増加を待ちたい。

一部途切れる部分があるなど深さは一定しないが5～20cmである。埋土は暗灰茶色粘質土と灰橙色粘質土が混和したもので、遺物は弥生土器が出土した。

S X104 調査区の中央で検出した不整形の落ち込みである。中央を溝S D102が切っているため正確な平面形状や規模、深さは不明であるが、推定長2.0m、幅1.2～1.5m、深さ10cm以上である。埋土は茶灰色砂混じりシルトで、遺物は出土しなかった。

S X105 調査区の南東隅で検出した落ち込みである。断面形は皿状で、深さは約15cmである。埋土は暗茶灰色粘土で、遺物は出土しなかった。

S X106 調査区の中央西寄で検出した円形の落ち込みである。一部分を検出したのみで全体の規模は不明である。底は平坦であるが中央でさらに一段深くなり、深さは約10cmである。埋土は淡灰茶色粘質土で、遺物は出土しなかった。

S R101 調査区の西側で検出した旧河道である。調査区外に続いたため長さは不明であるが、現状で11.8m以上、幅2.2m以上である。断面は概ね「V」字であるが斜面途中で一段急に深く変化し、最深部はさらに「U」字に窪んでいる。深さは約110cmで、埋土は場所によって若干の差異があるが、概ね上から順に灰褐色系砂、淡灰黄色砂質土、褐色砂礫と続く。最上部からは弥生時代後期の土器が、底面近くからは弥生時代中期の土器が出土した。

扁状地上を流れる妙法寺川の当時の一支流と考えられるが、人為的に掘削されたものであるかどうかは不明である。

S R102 調査区の北辺中央で検出した旧河道である。両側の肩を検出したのみで正確な規模は不明であるが、現状で7.7m以上、幅0.7m以上である。断面は「U」字と推定され、深さ100cm以上である。

埋土は上から順に褐灰色砂、白黄色砂、淡灰色砂と続く。遺物は弥生土器が出土した。これも扁状地上を流れる妙法寺川の当時の一支流と考えられるが、旧河道 S R101との関係は調査区外となるため不明である。ただ埋土は近似しているため同一路線の分流の可能性がある。

ピット ピットは直径あるいは長径10～30cm、深さ5～20cmの規模である。調査区の北東部分に比較的集中して検出されたが、建物を構成するようには纏まらなかった。

遺物が出土したピットは僅かで、ほとんどのピットからは遺物は出土しなかった。しかし、調査区西辺北寄で検出したピットの一つからは、中世頃の土師器と焼石が出土した。他の造構と同一面で検出したが、本来は1層上から掘り込まれた造構の可能性がある。

3. まとめ 飛松町遺跡は、今回新たに発見された遺跡で、これまでの調査事例はない。しかし南方には大規模な遺跡である戎町遺跡が存在しており、弥生時代前期・弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代初期・平安時代末～鎌倉時代の造構面を持つ複合遺跡であることが知られている。一方、飛松町遺跡は今回の弥生時代中期～後期・平安時代後期・鎌倉時代頃の造構が検出された。両者を比較することで周辺一帯の当時の状況を振り返ってみたい。

弥生時代中期～後期は戎町遺跡の最盛期であり、飛松町遺跡からは集落の痕跡は確認さ

れなかったが、一帯は戎町遺跡の行動範囲であった可能性が高い。しかも旧河道の中からも当該時期の遺物が出土していることは、さらに上流方向までもが行動範囲であったと推定できる。

平安時代後期の遺構や遺物は戎町遺跡からは確認されていない。むしろさらに南方の、「須磨驛家」の可能性が考えられる大田町遺跡と時期は近似している。今後飛松町遺跡での調査事例の累積によって、当該時期での一帯の土地利用の状況が明らかになるであろう。

鎌倉時代頃は戎町遺跡一帯では集落が確認されているが、飛松町遺跡では耕作地の水路と考えられる溝が検出された。しかし当時は数棟の建物が集まって一つの屋敷地を構成し、それらが複数集まって集落を形成している。また屋敷地と屋敷地の間は耕作地であることが通常である。単純に立地条件だけを見ると、飛松町遺跡は、扇状地の扇尖部にあるため、比較的湧水が多いとされる扇端部一帯に位置する戎町遺跡よりも居住域としては優れないと見える。

今回の調査では建物等は確認できなかったが、今後周辺での調査事例が増加していけば集落等が確認される可能性も十分に考えられよう。

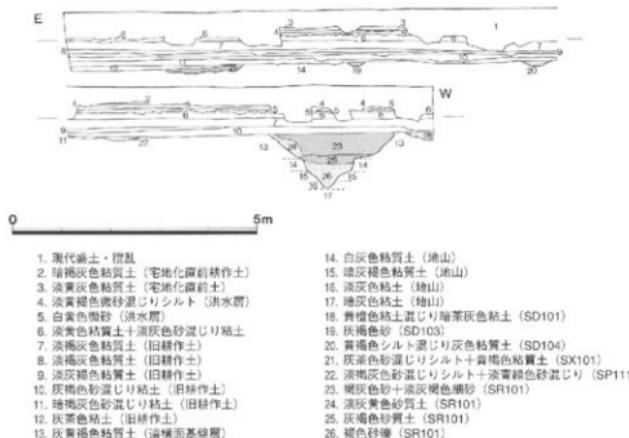


fig.288
調査区断面図

1. はじめに

寒風遺跡は伊川を臨む段丘上に位置する平成7年度に確認された遺跡で、平安時代後期の多数の遺構、遺物の出土から旧山陽道との関連が注目された。また平成8年度には玉津・鳥羽線建設に伴う発掘調査により、「大塁造り」の住居を含む、多数の古墳時代後期の住居跡が検出された。これ以降、近年の調査により集落の拡張が確認されつつある。また、近畿地方では出土例の少ない人形土製品なども出土しており注目されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査地は平成8年度の第2次、平成10年度の第3次調査地の北側、平成12年度の第8次調査地の西側に隣接する。西側は段丘崖となっていて大きな段差で落ちている。工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。



2. 調査の概要

調査地は、北東から南西へ大きく傾斜する。遺構は調査区の北東側で集中して検出された。溝2条、土坑1基、柱穴、ピット12基を検出した。

溝

検出された溝2条は共に北西から南東方向である。

S D01は調査区のはば中央で検出された。第8次調査でも確認されていた溝(S D01)に続くものである。幅0.4~0.8mで、深さは検出面から10cm前後である。

S D02は、調査区北東隅で検出された長さ1.6m、幅0.2m前後、深さは検出面から8cmである。

S D01とS D02からは古墳時代後期の須恵器、土師器が出土した。

土坑

S K01は調査区中央部で検出した長さ1.65m、幅0.65m、検出面からの深さ10cmの土坑である。古墳時代後期の須恵器、土師器が出土した。

この他、柱穴、ピット12基を検出したが、建物等を構成するものとしては確認されなかった。

3. ま と め 今回の調査では、段丘上に位置する古墳時代後期の集落本体から段丘崖の端部を検出した。第2次調査および第3次、第8次調査で検出された集落本体周辺の状況が確認され、西へ下がる傾斜面の埋土中からは古墳時代後期頃の須恵器、土師器片が多量に出土した他、紡錘車も出土している。これらの遺物は東側の集落本体からの流入と考えられる。

今回の調査は寒風遺跡の古墳時代集落復元の上で貴重なデータを得ることができた。

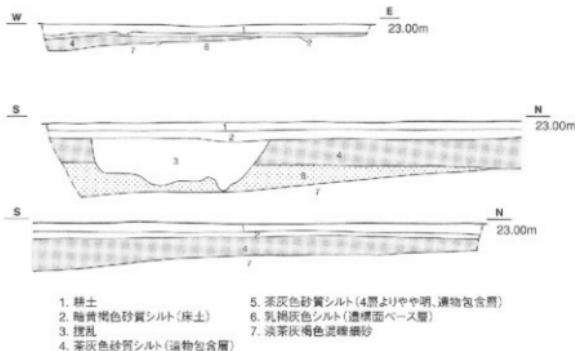


fig.290 調査区断面図



fig.291 調査区全景



fig.292 調査区平面図

16. 今津遺跡 第17次調査

1. はじめに

明石川流域の平地および段丘上にはほぼ全域に遺跡が広がる。今津遺跡は、そのうちの明石川左岸の低地域を占める。この地域はとりわけ弥生人にとってよい環境であったらしく、今津遺跡および隣接する新方遺跡などは弥生遺跡の宝庫といってよいほどにその質量とともに圧倒的なものがある。

今津遺跡では弥生時代前期・中期の遺跡が多く確認されているのに対し、後期のものはほとんど確認されていない。一方、東の段丘上にある高津橋・岡遺跡ではそれまで遺跡が稀薄であったものが後期に至り集落が確認されるようになる。このような状況から、後期に至って低地から段丘上への集落の移動があったものと推定されている。

ただ、最近行われた今津遺跡第14・15次調査では弥生時代末期あるいは古墳時代はじめの遺構が確認されており、この時期、再び低地に活動域が広がった状況がうかがえる。



2. 調査の概要

第1遺構面

古墳時代以降と弥生時代中期、計2枚の遺構面を検出・調査した。
洪水砂（3c層）に覆われる遺構面。幅約70cm・深さ約40cmの溝3条と土坑2基が検出された。3c層からは須恵器片がわずかに含まれ、第1遺構面が古墳時代中期以降のものであることがわかる。ただし、小片であり、また量も少ないためより細かな時期の判定はできない。

第2遺構面

5a層下面で検出される弥生時代中期の遺構面。焼失した竪穴住居1棟が検出された。

S B01

プラン円形とすれば径6.0mとなる。火災に遭い炭化材が多く残る。住居の南部には壁材がそのまま倒れこんだようなかたちで柱材が残る。中北部は材の破片のほか屋根に葺か

れる萱と思われる材が多く残る。また萱材の間には焼けた粘土塊が残る。あるいは屋根の一部に粘土が被せられていたかと推測される。

住居の中央には、径約80cmの円形で断面が漏斗形を呈する深さ約40cmの中央土坑があり、その東床面で高杯が出土した。杯部は焼け落ちた材によって壊れ周囲に散らばるが、脚部は正位の状態を保ちその上を炭化材が覆う。

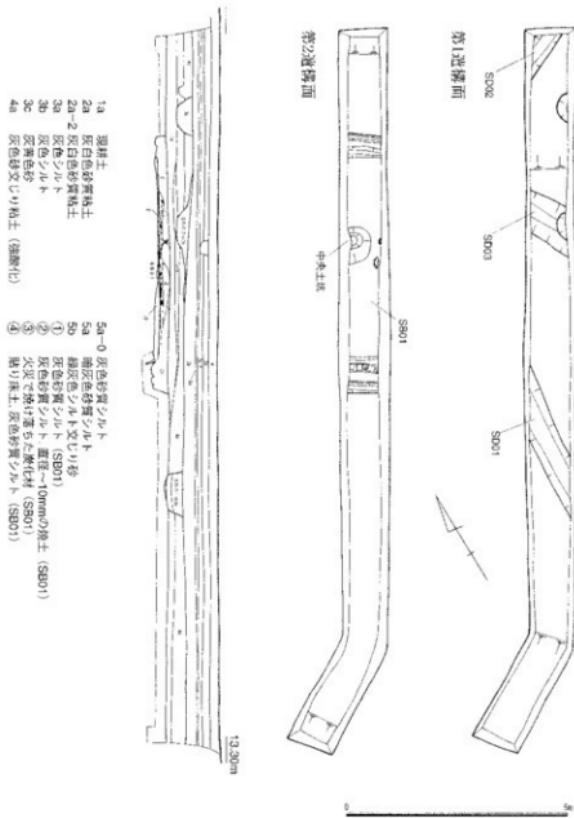


fig.294
調査区平面図・断面図

3. まとめ 小面積の限られた条件の中での発掘であったが、良好な状態で残る堅穴住居が確認され、段丘下の低地においても弥生時代中期集落の存在することが明確になった。

第14・15次調査では弥生時代末の溝などが検出され、今回、上層で古墳時代以降の遺構面が、さらに包含層からは飛鳥時代また中世の遺物が出土しており、今後調査が進むことにより、複合遺跡としての今津遺跡の姿が明らかになっていくものと思われる。

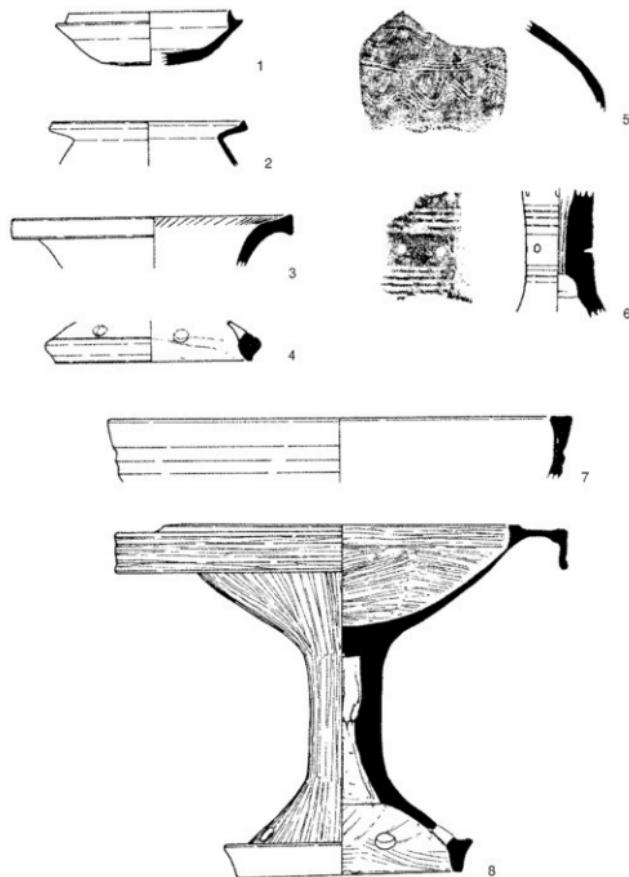


fig.295
出土遺物実測図

図4 出土遺物 1：1層、2～6：5a層、7・8：SB01 (1：須恵器、～8：弥生土器)



fig.296
S B01
炭化物出土状况



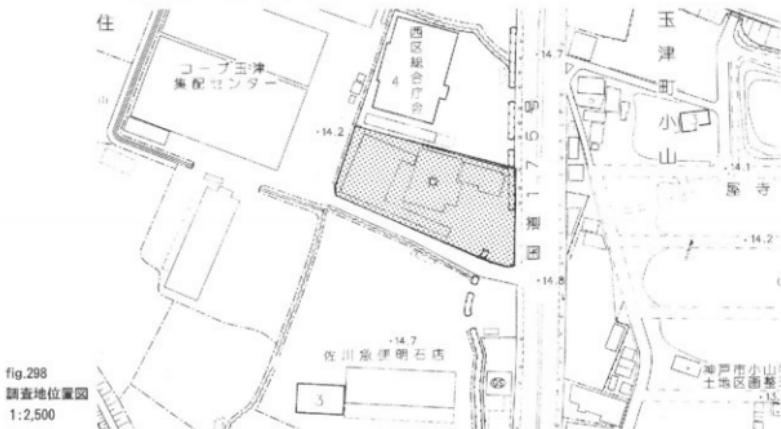
fig.297
S B01
遺物出土状况

17. 居住遺跡

1. はじめに

居住遺跡は、弥生時代前期～古墳時代後期にかけての遺物が出土している他、平安時代末～鎌倉時代の集落も確認されている遺跡である。

今回の調査地の北側に接した、西区役所の建設に伴う調査では、弥生時代中期の土坑群や平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物等が確認されている。



2. 調査の概要

今回は商業ビルの建設に伴い、その基礎により遺跡が破壊される部分についてのみ、G r. 1～10を設定し調査を実施している。

基本層序

基本層序は盛土、耕土、旧耕土、暗褐色砂質土、淡黄灰色砂質土（上面が第1遺構面）、灰色砂質土、淡黄灰色砂質土（上面が第2遺構面）となる。

検出遺構

古墳時代前期（布留式期）の溝を検出した第1遺構面と、時期不明の落ち込みを検出した第2遺構面を確認している。第2遺構面は調査区の南半だけで確認しており、調査区の北半では第1、第2遺構面が、同一遺構面として確認している。

第1遺構面

G r. 4で検出した。ほぼ南北方向に延びる溝である。幅約95cmで、深さ約35cmを測る。古墳時代前期（布留式期）の壺等が出土している。

S D01

G r. 7で検出した。ほぼ東西方向に延びる溝である。幅約120cmで、深さ約40cmを測る。布留式期の高杯等が出土している。

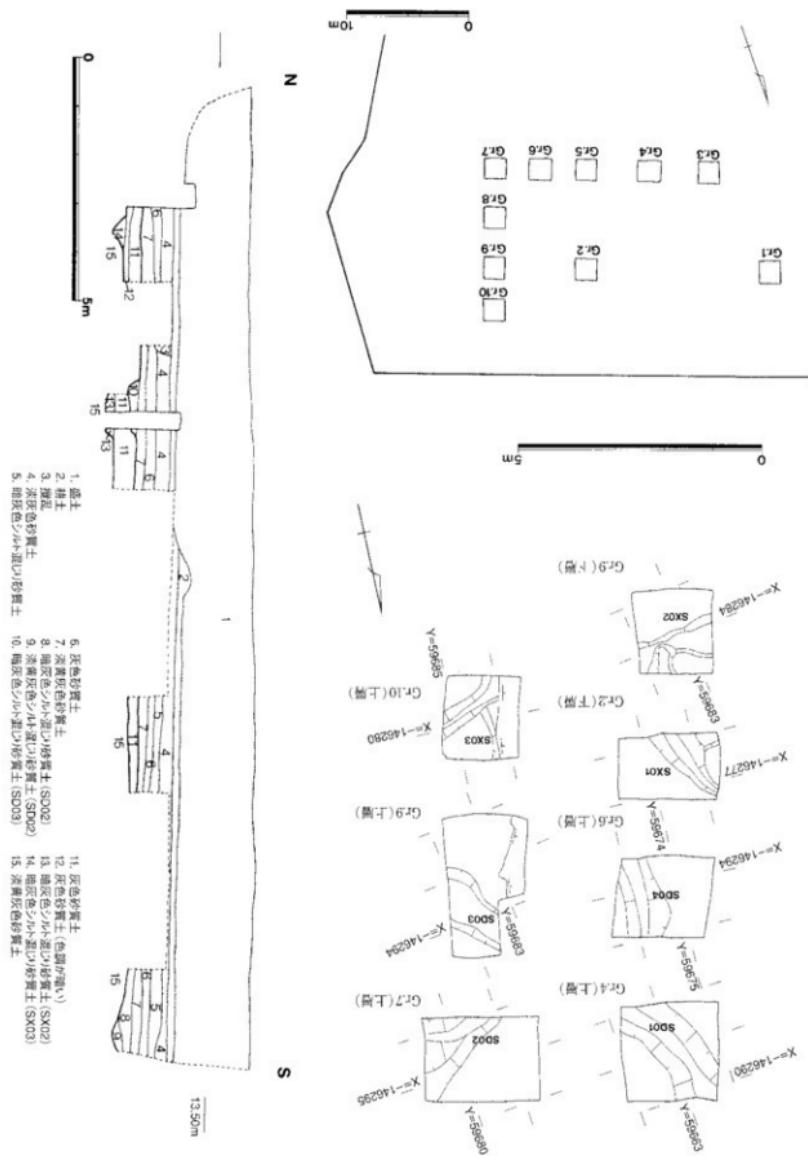
S D02

G r. 9で検出した。北東～南北方向に延びる溝である。幅約160cmで、深さ約18cmを測る。古墳時代前期（布留式期）の縦岐形の壺の口縁部を含む、多数の壺や甕が出土しており、一括資料となる。また、この溝から出土した壺内部から、極めて多数の炭化米が出土している。

S D03

G r. 6で検出した。ほぼ南北方向に延びる溝である。幅約80cmで、深さ約35cmを測る。古墳時代前期（布留式期）の細かな土器片が出土している。

Fig. 299 錦糸町区平面圖・断面図



- 第2遺構面 G r . 2 で検出した。東西幅約110cm以上で、深さ約25cmを測る不整形の落ち込みである。
- S X01 時期不明の弥生土器か土師器の細かな破片が出土している。
- S X02 G r . 9 で検出した。南北幅約110cm以上で、深さ約25cmを測る不整形の落ち込みである。遺物は出土していない。
- S X03 G r . 10 で検出した。東西幅約40cm以上で深さ約14cmを測る落ち込みに、幅約44cmで深さ約25cmの溝状遺構が接続している。遺物は出土していない。

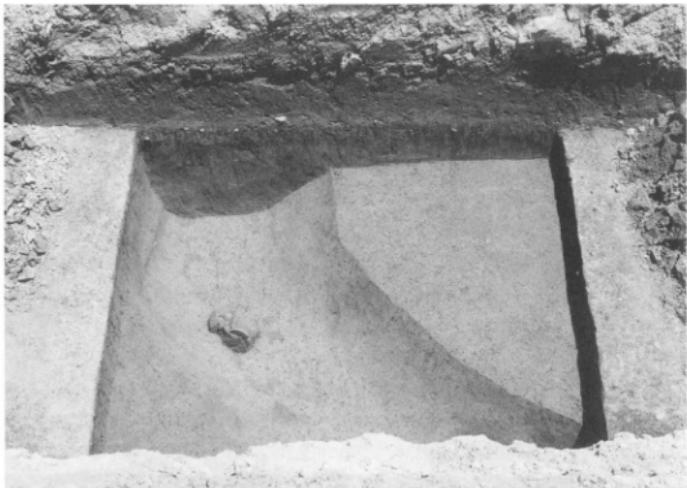


fig.300
G r . 4 全景



fig.301
G r . 6 全景

3. ま と め 今回の調査地は居住遺跡の東端に位置する。この調査地に隣接した以前の調査では、弥生時代中期と中世前期の集落に関連する遺構が確認されている。ただし今回の調査では、弥生時代中期・中世共に遺構と遺物は出土しなかった。2面の遺構面から古墳時代前期（布留式期）の溝と、それ以前の時期不明の落ち込みを確認している。

第1遺構面では布留式期の多くの溝を検出している。遺物のなかでは、S D03出土の土器群が注目できる。古墳時代前期（布留式期）の一括資料である。特に讃岐形の壺が出土した事実が、注目できる。また同じく S D03で確認した壺内部から、極めて多数の炭化米が出土している事実も注目できる。

堅穴住居や柱穴等の、集落居住域に直結する遺構は確認できなかった。ただし、炭化米を出土する壺等の S D03一括資料を始め、多くの古墳時代前期（布留式期）の土器が出土している。集落居住域の本体ではないが、その極めて近くを調査したものと考える。

第2遺構面では時期不明の落ち込みが確認されている。この落ち込みは自然に形成された可能性も存在する。ただし少量ではあるが時期不明の土器片も出土している。これまでの調査結果とも合せ、近隣に布留式期以前の集落も存在すると考える。

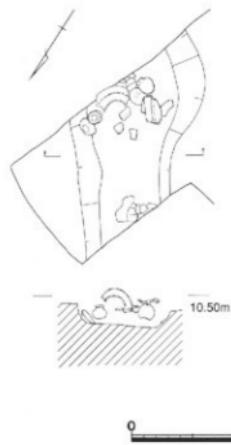


fig.303
G r. 9
S D03

18. 玉津田中遺跡

1. はじめに

玉津田中遺跡は明石川中流域東岸に位置し、縄文時代晚期～中世までの遺物が出土する複合遺跡である。特に弥生時代には、明石川流域の拠点集落として知られている。今回の調査地は、この玉津田中遺跡の北端部に位置している。

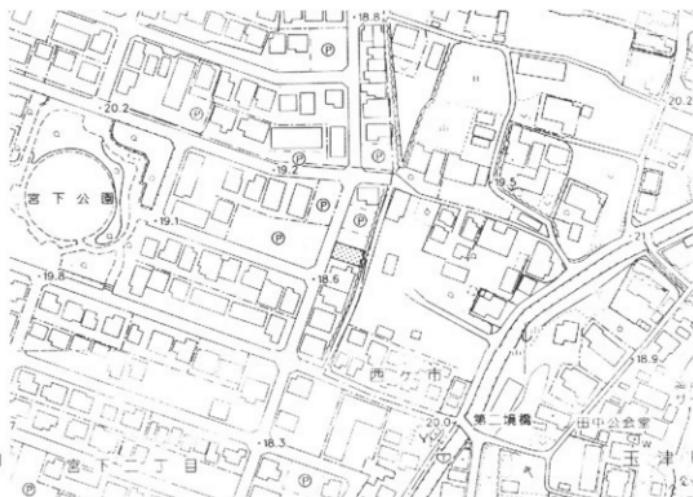


fig.304
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

今回は下水道の埋設に伴い、遺跡の搅乱される範囲について調査を実施している。

基本層序は盛土、耕土、淡茶褐色砂質土（上面が近世遺構面）、淡灰褐色砂質土（中世遺物包含層）、暗黄灰褐色砂質土（上面が中世遺構面）となる。

検出遺構

近世と考えられる柱穴と、中世の落ち込みを検出している。

柱穴

5ヶ所で確認している。径約20～40cmで、深さ約7～52cmを測る。遺物は中世の須恵器と土師器の細片しか出土していない。ただし土層断面にかかる柱穴（S P 03）を観察すると、淡茶褐色砂質土近世遺構面から切り込んでいる。中世に遡る可能性のある柱穴も存在するが、すべて近世の遺構である可能性が高い。

落ち込み1

幅約2.1mで、深さ約0.3mを測る落ち込みである。暗黄灰褐色砂質土中世遺構面から切り込んでおり、中世の須恵器と土師器の細片が出土している。ただし自然地形の落ち込みである可能性が高い。

落ち込み2

幅約6.5mで、深さ約0.5mを測る落ち込みである。暗黄灰褐色砂質土中世遺構面から切り込んでおり、中世の須恵器と土師器の細片が出土している。

ただし自然地形の落ち込みである可能性が高い。

3. まとめ

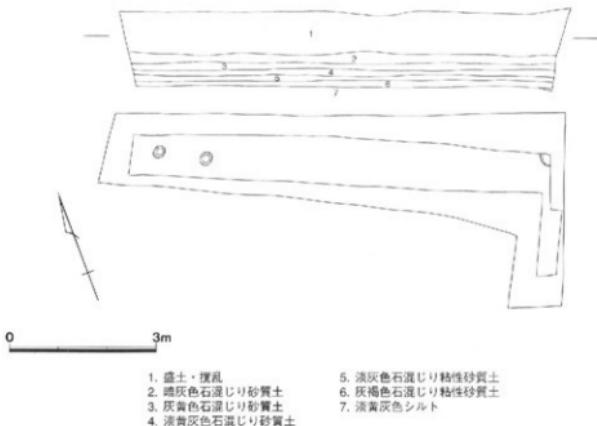
今回の調査地では、明らかに中世に遡る遺構は確認されなかった。（ただし柱穴の一部が中世に遡る可能性は存在する。）水位も高く、中世遺構面では常に排水が必要な状態で

あった。中世の段階では、周囲は基本的に湿地帯である可能性も考えられる。

調査地の南方には福中城跡の存在も知られている。中世の平城は防御の必要性から、湿地帯に造営される事が基本である。今回の調査地周囲が湧水地帯である事も、これと関係があるかもしれない。



fig.305
調査区全景



1. 盛土・礫乱
2. 淡灰色石混じり砂質土
3. 灰黄色石混じり砂質土
4. 淡黄色石混じり砂質土
5. 淡灰色石混じり粘性砂質土
6. 灰褐色石混じり粘性砂質土
7. 淡黃灰色シルト

fig.306
調査区平面図・断面図

V. 平成16年度の保存科学調査・作業の概要

平成16年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

遺物の保存科学

木製品

東灘区の本山遺跡は、弥生時代前期の流路中から農具など多数の木製品が出土した事で知られている。平成15年度は第34次調査（平成11年度）で出土した木製品278点について保存科学的処置を実施した。遺物をポリエチレングリコール（PEG-4000S）水溶液中に浸漬し、20%より始め、約6ヶ月をかけて70%まで濃度を上げ、含浸処理を行なった。その後真空凍結乾燥機で乾燥し、処置を完了した。現在は恒温（23.5°C）恒湿（55%RH）の収蔵庫において保管している。

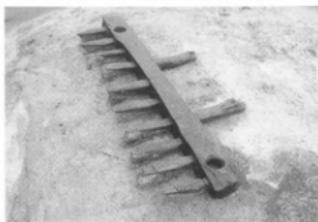


左) fig.307
処理後復元作業
右) fig.308
保存処理後



小路大町遺跡

小路大町遺跡第4次調査で出土した木製馬鍬について、保存科学的処置を実施した。各材に使用された樹種は報告書に掲載したので割愛するが、主にアカガシ亜属を使用した堅牢なものである。劣化度を調べるため、台木の破損部より少量をサンプリングして含水率を計測したところ、約450%であった。これについても上記の本山遺跡出土木製品同様の処置を行ない、収蔵保管している。



上左) fig.309
出土状況
上右) fig.310
含浸処理準備
下左) fig.311
欠損部樹脂補填
下右) fig.312
処理後展示風景



金属製品

森南町遺跡

森南町遺跡第2次調査において、井戸跡（S E 03）が検出され、中から戦国時代の備前焼・中国陶磁などと共に鉄鍋が出土した。鉄鍋の中には鉄製品の破片が入っており、X線透過観察等によって板状の鋳造鉄製品が破碎された状態で鉄鍋と銹着している事がわかった。そこで事前に写真と実測による記録を取った後、精密グラインダーを用いて両者を取り外す事となった。

結果、鉄鍋に入っていた遺物が2個体分の鉄製鞆先であることがわかった。これらはクリーニング後、脱塩処理（水酸化リチウムアルコール溶液に約3か月間浸漬）し、アクリルエマルジョン合成樹脂（パラロイドN A D-10）を減圧含浸して強化措置とした。接合と欠損部の補填にはアクリル系合成樹脂（アルクインM H-1）を用いている。処理後はハイバリアフィルムチューブに金属酸化防止剤（R P剤）と共に封入し、恒温（23°C）恒湿（50% R H）の収蔵庫にて保管している。

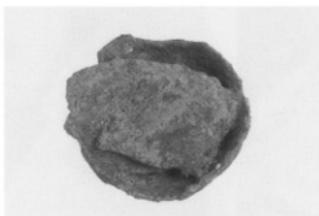


fig.313 处理前



fig.314 鞆先取り外し後



fig.315 鉄鍋保存処理完了後



fig.316 鞆先保存処理完了後

白水瓢塚古墳

平成15年度に実施した白水瓢塚古墳第10次調査で出土した遺物のうち、青銅鏡1面について保存科学的処置を実施した。出土状態で多数の細片に割れていたことにより、不織布等を用い、裏打ちを施した上で取り上げ、その状態のまま保存処理に移行した。

クリーニング前にX線透過観察を行なった結果、想像以上に腐食が進行しており、健全なメタルが残存している部分は少ないものと考えられた。そこで腐食の進行を抑えるため、ベンゾトリアゾール（B T A）のアルコール溶液に浸漬した。

その後、鏡背側について実体顕微鏡下で表面状態観察しながら、綿棒や刷毛を使用して物理的なクリーニングを実施した。主に付着した土壌の除去が目的であったが、棺材と思われる木質や赤色顔料等が残存しており、サンプリング等の作業を慎重に行ないながらクリーニングした。

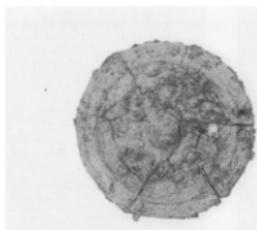


fig.317 保存処理前状況

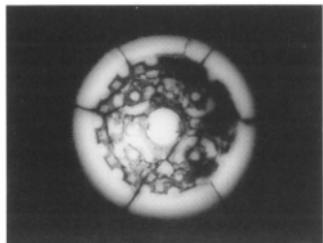


fig.318 X線透過画像

さらに反転し、鏡面側に施した取り上げ用の裏打ち材を除去し、鏡背同様にクリーニングをおこなった。その後、パラロイドB72を滴下して強化措置とし、接合可能な破片についてはセルロース系接着剤（セメダインC）による接着と、破片間の補強のためにアルタインMH-1によって補填をおこなった。



fig.319 クリーニング作業



fig.320 保存処理完了後

遺構の保存科学

脆弱遺物の取り上げ 兵庫津遺跡は中～近世の港湾都市遺跡である。平成16年度の第36次調査では、近世の堀の護岸工事に伴う土臺列が検出された。土を入れた臼が辛うじて残っていたが、普通に取り上げる事は困難であり、発泡ウレタンフォームを使用した切り取り工法による取り上げを実施した。

設置された土臺の下半内面を精査し、アルミホイルで養生する。周辺に木材で枠を構築し、全体を発泡ウレタンフォームで梱包した。バックホーで吊り上げ、埋蔵文化財センターに搬入した後は、保存・公開に向け保存処理を実施する予定である。



fig.321 出土状況



fig.322 育生作業



fig.323 ウレタン梱包状況



fig.324 吊り上げ作業

土層転写
平成15年度に発掘調査を実施した内田家住宅では、竈が検出された土間について、平面的な土層転写を実施した。転写した土層は埋蔵文化財センターにおいて保管していたが、平成16年度、内田家住宅の保存修復事業完成にともない、屋内の展示公開を目的としたパネル作成を行うこととなった。

パネルの基本構造は、角材による補強を施した合板に転写土層を接着剤で貼り付けるものである。接着にはマイクロバルーン（Fillite (52/7 (F G))）を混和したエポキシ系合成樹脂（アラルダイト A E R 2400）を使用した。接着後は土層の剥落止めと色調をより自然にするために、石材強化剤（OM10）を2回塗布した。乾燥後、額縁および支持台を装着した上で、現地に展示している。



fig.325 遺構検出状況



fig.326 パネル貼り付け作業



fig.327 設置作業



fig.328 設置完了状況

展示模型製作

平成16年度秋季企画展示「兵庫津」の開催にともない、エントランス部のディスプレイとして「従是東尼崎領」の石柱を設置することとなった。この破片は兵庫津第29次発掘調査において出土しており、当初はこれを基に模型作製をする予定であったが、造形に困難であるとの判断から、完形品より型取りし、合成樹脂により製作することとなった。型取りは伊丹市の日枝神社に所在するものからおこなった。

型取りにはシリコーン合成樹脂を使用した。まずブラシ等で表面に付着した土砂や苔を落とし、離型剤として薄く溶いた石鹼水を塗布した。乾燥後、シリコーン合成樹脂（信越：KE-20）を塗布し、硬化したシリコーンの上に吹き付け式の発泡ウレタンフォームでバックアップを施した。その後、型を取り外し埋蔵文化財センターに持ち帰った。

2分割した型それぞれにエポキシ系合成樹脂（小西：Kモルタル）を入れ、硬化後内部の空洞に発泡ウレタンフォームを充填した。その後土台を作成して自立できるようにし、アクリル絵具で塗装し、作業を完了した。



fig.329 現地実物



fig.330 シリコーン型取り



fig.331 彩色作業



fig.332 展示設置状況

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
森北町遺跡	21	鉄釘	4
森南町遺跡	3-3	鉄釘	1
西郷古酒蔵群	3	鉄釘、銅錢	140
神戸臨港鉄道南本町製造横台跡	1	鉄釘	1
精・荒田町遺跡	32	鉄釘	5
祇園遺跡	12	鉄釘	3
大間遺跡	11	鉄製品、鉛津	3
人間遺跡	12	鉄釘、鉛津	8
袖・荒田町遺跡	32	鉄釘	5
兵庫松本遺跡	20	鉄錐	1
兵庫松本遺跡	23	鉛津	1
兵庫津遺跡	35	鉄釘、銅錢、鉛岸	20
兵鹿津遺跡	36	簪、銅錢、彈管、銅容器	432
小部北ノ谷遺跡		鉄釘	3
石峯寺坊跡	1	鉄釘、包丁、銅製品	9
淡河城跡	3	鉄釘、鉄製品	3
大橋町遺跡	1-2	鉄釘	1
大橋町遺跡	1-4	鉄錐先、鉄釘	7
大橋町遺跡	1-6	鉄製品	1
二葉町遺跡	18-1	銅製品	1
二葉町遺跡	18-4	刀子、鉄塊系遺物	7
二葉町遺跡	18-5	銅錢、鉄釘	4
御藏遺跡	54	鉄釘、鉛津	3
行幸町遺跡	5-1	鉄釘	5
戎町遺跡	60	銅錢	1
寒風遺跡	9	鉄釘	3

計672

表1. 平成16年度出土金属製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
兵庫津遺跡	35	簪、板、部材	18
兵鹿津遺跡	36	亭塔張、蓋、漆碗、下駄、箸	1
大橋町遺跡	1-4-6	柱材、加工材	3
行幸町遺跡	5-2	井戸枠、柱材	92

計114

表2. 平成16年度出土木製品

遺跡名	次数	樹種同定	材質
住吉宮町遺跡	23	242点	
本山遺跡	34	278点	
兵庫津遺跡	26		8点(銅錢)

表3. 平成16年度自然科学分析委託

平成16年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成19年3月 印刷

平成19年3月 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印 刷 南アロエ印刷

神戸市中央区古湊通1丁目15301号

TEL 078(371)3831

神戸市広報印刷物登録 平成18年度 第273号（広報印刷物規格 A-6類）



本書は、再生紙を使用しています。